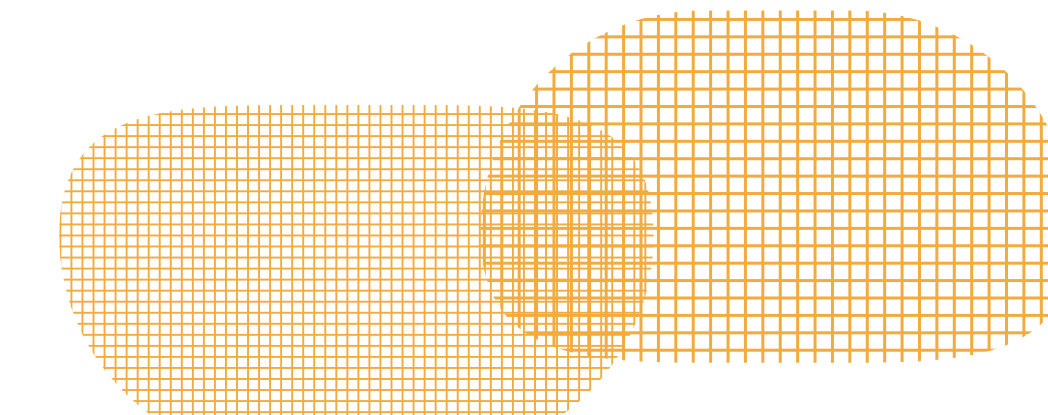
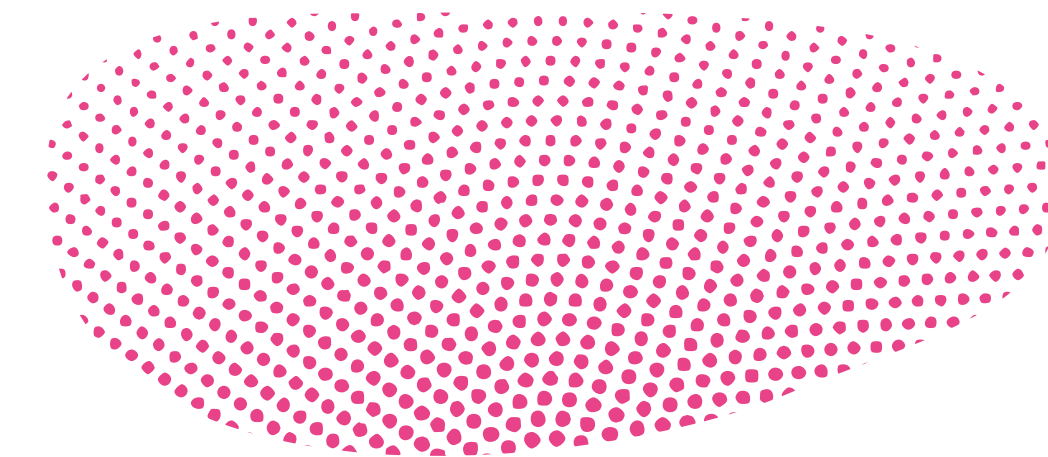
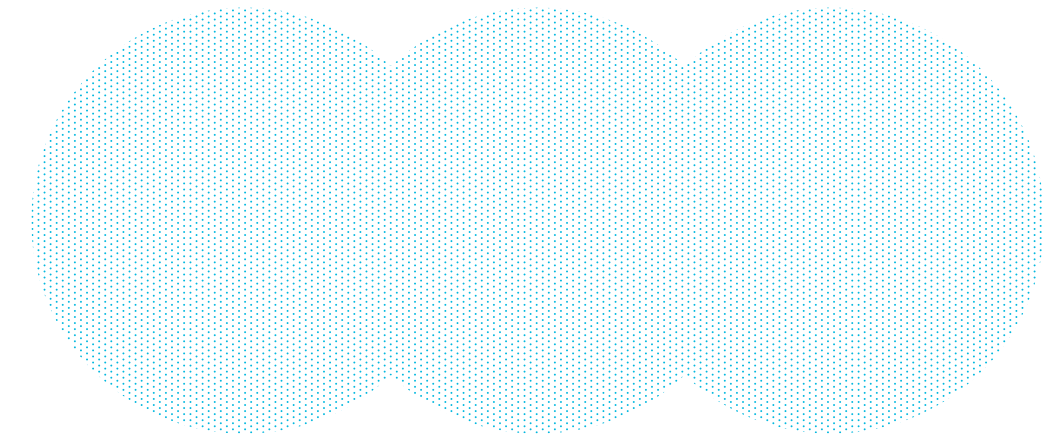


佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート

SMAART 2019年度 記録集



## 目次

ごあいさつ	3
●SMAART について	4
●2019年度 SMAART について	6
●2019年度スケジュール	7
アートマネジメントセミナー	9
●講座「アートプロジェクトの評価と終わり方」	10
●アートスペース見学 プラクティス編 in 尾道	12
●展覧会「オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室」	16
●展覧会「発生の場 / Ignition Field」	24
●受講生の声・受講生の構成	34
モバイル・アートクリニック	35
●受講生の声・聴講者の声	40
アート情報サイト potari の運営	41
●演習 ポータルサイトの運営 / 演習 夏を感じる広報紙の制作	42
●演習 ローカルメディアを解体する	43
●演習 記事執筆実践トレーニング①②	43
●演習 写真を撮る / 演習 有田町集中取材・現地取材記事編集	44
●演習 冬を感じる広報紙の制作	45
●演習「稼ぐ!」Webライターになるには / 演習「いいね!」の作り方	45
●編集部員が SMAART 主催のイベント取材しました!	46
●「ほたりニュース」編集を終えて	46
●演習のまとめ	48
●編集部員の声・編集部員の構成	50
SMAART 大発表会	51
エッセイ	55
●SMAARTの3年間 小坂智子	56
●尾道市、雑感 西島博樹	57
●SMAART3年間に寄せて 花田伸一	58
●路地裏のpotariに花は咲くか 杉本達彦	59
資料	61
●広報資料 / メディア掲載一覧	62
●講師プロフィール	64

## ごあいさつ

「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート」[Saga Mobile Academy of Art 略称:SMAART] は、佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトで、「文化庁 大学における文化芸術推進事業」として取り組まれるものです。

本プロジェクトでは地域の方々を対象に2017年度から3年間にわたってセミナーと実践的な活動を展開するとともに、地域の文化芸術に関する情報や人材が集まるネットワークづくりを目指しました。

2017年度には「スタートアップ入門編」、2018年度には「ブラッシュアップ応用編」として、佐賀県内のやきもの・食・観光・歴史に関する地域資源を再発見するセミナーやアートマネジメントの基本を学ぶセミナーを開講しました。また県内の文化芸術情報を発信するWebサイト構築に取り組みつつ、実験的にアートカフェやアーティスト・イン・レジデンスの企画体験をしながら、アートを通じて人々が交流する「アートカフェ」実現に向け、その可能性を受講生の方々と模索していきました。

2019度は「プラクティス実践編」として、前年度までの成果をふまえて、招聘アーティスト・受講生・地域住民とともに、江戸期に「茶」を通じて人々に禅の教えを説いた佐賀県ゆかりの禅僧「売茶翁」にちなんだアートプロジェクトおよび、佐賀大学美術館において展覧会のマネジメント実践に取り組みました。また、前年度から引き続き、県内および近隣の文化芸術情報を発信するWebサイトの運営にも取り組みました。

本書はSMAARTの2019年度の活動についての記録です。「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」をモットーに佐賀大学が2016年度に開設した芸術地域デザイン学部によって企画運営される本プロジェクト、その“プラクティス”の記録をどうぞご覧ください。

2020年3月  
佐賀大学芸術地域デザイン学部





文化庁 大学における文化芸術推進事業

# 芸術を通じた地域創生人材の育成

佐賀の地域資源をめぐるアートカフェとネットワークづくり



佐賀県内外で自ら主体的にアートプロジェクトの企画実践および効果的な情報発信をできる文化クラスターの形成



## 2019年度 SMAART について

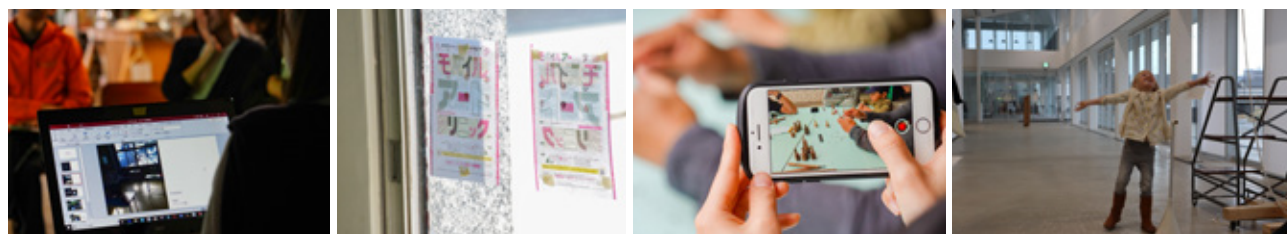


SMAART 最終年度となる2019年度は、地域資源の再発見およびアートマネジメントに関する学びの場を提供する「アートマネジメントセミナー」と、2018年度に開設した文化芸術の情報発信サイト「potari」の運営を学ぶ「アート情報サイト potari の運営」の二本柱で展開。

「アートマネジメントセミナー」では、はじめにマネジメント人材育成の講座を開催し、受講生各自で1年間取り組むテーマを決定した。また、学外研修を実施し、地域においてアートの活動を実践している地域を見学。それらを踏まえてアートプロジェクトや展覧会のマネジメント実践に取り組んだ。

「アート情報サイト potari の運営」では、事業終了後の持続的なサイト運営のため、記事執筆や取材写真の撮影の演習、有田での集中取材などを実施し、編集者としてスキルアップのため様々なプログラムに取り組んだ。

年度の締めくくりとして、受講生による1年間の活動報告会を開催し、これまでの活動を総括する機会とした。



## 2019年度スケジュール

アートマネジメントセミナー		アート情報サイト potari の運営		
		5月		
		16木	ポータルサイトの運営 / 編集部ミーティング 講師: 杉本達彦	
15土	アートプロジェクトの評価と終わり方 講師: 森司 / 若林朋子	6月		
		6木	夏を感じる広報紙の制作 / 編集部ミーティング 講師: 江副哲哉	
		21金	ローカルメディアを解体する 講師: 阿部純	
13土 ▼ 15月祝	アートスペース見学 プラクティス編in尾道	7月		
18木		アートマネジメントミーティング	11木	記事執筆実践トレーニング① 講師: 忠聡太
			25木	記事執筆実践トレーニング② 講師: 忠聡太
3土	モバイル・アートクリニック 武雄編 講師: 中ザワヒデキ / 辛美沙	8月		
24土	アートマネジメントミーティング プロジェクト説明会 講師: オレクトロニカ / 佐々木元康	1木	編集部ミーティング	
7土	モバイル・アートクリニック 多久編 講師: 椿昇 / 山下里加	9月		
19木	アートマネジメントミーティング	12木	編集部ミーティング	
		28土	写真をとる 講師: 関めぐみ	
17木	アートマネジメントミーティング 講師: オレクトロニカ	10月		
19土	モバイル・アートクリニック 鹿島編 講師: 島袋道浩 / 鷺田めろろ	10木	編集部ミーティング	
		26土	有田町集中取材	
		27日	現地取材記事編集	
3日	プロジェクト実施① 売茶翁アートカフェプロジェクト 「オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室」	11月		
4月祝		7木	冬を感じる広報紙の制作 / 編集部ミーティング 講師: 江副哲哉	
9土 10日				
21木	アートマネジメントミーティング	12月		
		19木	アートマネジメントミーティング	
11土 ▼ 26日	プロジェクト実施② 展覧会「発生の場 / Ignition Field」	1月		
		5木	「稼ぐ!」Webライターになるには / 編集部ミーティング 講師: いわたてただすけ	
	SMAART大発表会 講師: 森司 / 若林朋子 / 倉成英俊 / オレクトロニカ	9木	「いいね!」の作り方 / 編集部ミーティング 講師: いわたてただすけ	
		26日	SMAART大発表会 講師: 森司 / 若林朋子 / 倉成英俊 / オレクトロニカ	
		2月		
		14金	編集部ミーティング	
		3月		
		5木		





アートマネジメント  
セミナー

## 講座「アートプロジェクトの評価と終わり方」



2019.6.15±

時間 10:00～16:00  
 会場 佐賀大学本庄キャンパス  
 芸術地域デザイン学部1号館  
 A101 講義室  
 講師 森司  
 (アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長)  
 若林朋子  
 (プロジェクト・コーディネーター/  
 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授)  
 出席者数 12名

SMAART 最終年度のアートマネジメントセミナーの初回講座は、午前中は講義、午後はワークショップというスケジュールで開催。

森司氏は講座のはじめに、プロジェクトは「何をもって始まりとし、何をもって終わりとするのか」という質問を投げかけ、受講生からは様々な回答が挙げられた。森氏はこの回答を受け、同じ言葉でも認識は人によって「違うもの」であり、「終わり＝着地点」も違ってくるということを説明。チーム内で同じ着地点へ向かう上で必要となってくるのは「共通言語(認識)」を持つことであり、それを軸にプロジェクトを進めることを強調された。

若林朋子氏はプロジェクトの「評価」についてレクチャー。「評価」の一般的な説明をおこない、加えて自分たちの納得いく方法や指標で評価するためには何が必要かを示された。プロジェクトの目的は何なのか、何をもって目的が達成されたとするのか、変化したことをどう測り、分析し、いつ何のために使うのかを先に考えることが必要であり、「結果の実装、実体化」を考えるために「使うための評価の設計」をすることの大切さを説明。評価するタイミングや様々な形式・方法、その目的には違いがあることも述べられた。



講師：森司氏



講師：若林朋子氏



午後は、午前中の講座を活かし、この1年どのようなテーマをもって SMAART の活動を締めくくるのか、受講生それぞれが考えるワークショップを実施。これまでアートシーンに関わった中で印象に残ったものを思い出し、クリアになっていないことをワークシートに書き出し、1人1人発表をおこなった。講師2名による丁寧なアドバイスもあり、発表を通して着地点がみえてくる人もいた。

SMAART が1つのチームとなって同じ着地点にたどり着けるよう、また、それぞれの「終わり方」を納得のいく形で見つけられるよう取り組んでいかなければと改めて感じる「終わり」の「はじまり」であった。(緒方・吉村)



アートスペース見学 プラクティス編 in 尾道 参加者：14名

目的

地理的特徴は異なるが、人口の推移や空き家率増加の傾向が佐賀と類似しており、そこから町の再生に向けた成功例として参考になる点、さらに「アートとまちづくりの融合」が随所にみられる尾道を巡ることで「地域資源を生かしながらアートを通じた地域創生」をテーマに掲げる SMAART の活動の参考にすべく訪れた。

1日目 2019.7.13

協力：ART BASE MOMOSHIMA

- 福田港
- ↓
- 乙 1731 -GOEMON HOUSE
- ↓
- 改装中の AIR ハウス
- ↓
- 日章館 見学  
(柳幸典の《ヒノマル・イルミネーション》を常設展示)
- ↓
- みんなのいえ (伊藤豊雄 設計)
- ↓
- ART BASE 百島



百島到着後、島の概要説明



作品解説に耳を傾ける参加受講生

1日目は瀬戸内海に浮かぶ人口約400人の小さな島「百島」に上陸。この島ではアーティストの柳幸典さんが「アートを手段としてではなく目的として」活動するために開設した「ART BASE 百島」を訪れた。また、島内に点在する使用されなくなった施設や住宅を「アートを活用して再生する事業」の説明を受けながらスタッフの八島さんの案内の下徒歩で巡った。その中には「乙 1731 -GOEMON HOUSE」(宿泊施設)のような地元住民の雇用創出につながる企画も存在している。この島では、場を生かしたアートの表現の力を知ると共に、地域を活性する役割も担うことを改めて目の当たりにする好機となった。



尾道と百島を結ぶ「ART BASE MOMOSHIMA」デザインのフェリー



柳幸典の《ワンダリング・ミッキー》を常設展示



アートスペースとして復活を遂げた旧映画館「日章館」



中学校の旧校舎を改装した「ART BASE 百島」。島の高台に位置する

2日目 2019.7.14

協力：NPO 法人 尾道空き家再生プロジェクト  
光明寺會館 / AIR Onomichi

- 尾道駅 北口
- ↓
- 松翠園 大広間 (天井画プロジェクト)
- ↓
- 三軒家アパートメント
- ↓
- 北村洋品店
- ↓
- ガウディハウス (登録有形文化財)
- ↓
- 光明寺會館
- ↓
- シドラハウス
- ↓
- みはらし亭 (登録有形文化財)
- ↓
- あなごのねどこ



尾道駅北口集合 ツアースタッフの神田さんとルート確認中



天井に描かれているのは再生を支援している団体のロゴ  
地元大学生による作品であり現在も増加中



空き家再生プロジェクトの象徴的建造物「ガウディハウス」



「坂のまち」なため案内はほぼ上向き



傾斜地に点在する「空き家」



プロジェクトのコンセプトの一つ「空き家×観光」事業に踏み込むきっかけとなった宿泊施設



「AIR Onomichi」代表の小野環さん

2日目は2007年より空き家の再生を通して尾道の町並みをアートと融合させる「尾道空き家再生プロジェクト」の活動を巡るツアーに参加した。尾道は、元々交易で栄えた商人の別荘地であり、また建替えも困難なことから「様々な時代の建築物」が趣きを残したまま今も建ち続けている。一方で現代の社会問題(車社会、核家族、少子高齢化等)にも直面し、この傾斜地には数多くの空き家が存在している。これまで100件にも上る空き家再生が行われてきた中から、今回は「ガウディハウス」や「みはらし亭」など象徴的な物件に絞って見学を行った。

また、「AIR Onomichi」の活動拠点となっている「光明寺會館」では代表の小野環さんよりこれまでの活動紹介と併せ、尾道のまちの推移を写真や地図など時代ごとに比較しながら解説していただいた。

総括

この研修には、受講生はそれぞれにテーマを決めて参加をした。研修終了後、参加受講生は自身のテーマに沿って見聞きしたものをレポートにまとめた。「アートと地域資源」のつながりを考える人、人を引きつける地域の魅力について考える人、自身の職業へのヒントを見つけた人など、様々な関心のあり方が示された。

参加者は皆同じものを見聞きした3日間であったが感じとった内容は多様であり今後への展開において多方面に活用されることが期待される。(緒方)



## アートと地域資源

徳永 幸治 (一般)

初めて尾道を訪れたのは、30年前の1989年。この地への興味のきっかけは、くねくね曲がった細い坂道であったり、路地の先に見える海の風景だったり、また大林宣彦監督の映画の影響だったりしたのですが、その当時から街の雰囲気は、既にレトロ感たっぷりて哀愁を感じるものでした。

それから、何回となく尾道を訪れているのですが、街中心部の建物の並びや商店街のたたずまいは、駅や一部の施設を除いてはそれほどの変わりはなく、ただここ数年の来訪者の多さには驚きました。もちろん、レトロな雰囲気の街だけでなく、サイクリングツーリズムや瀬戸内の島々への観光も含めて、国内外からの訪問者が増えているのでしょうけれど。

### NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト

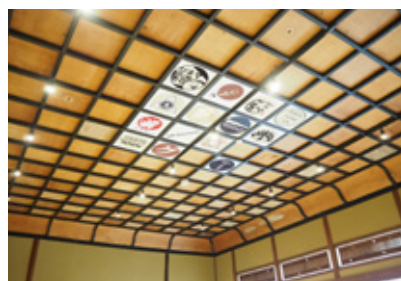
その中で、今回案内頂いた「尾道空き家再生プロジェクト」の取り組みはとても興味深く感じました。

30年前に初めて訪れた時の街の印象から、今も変わらず感じるものに、この地での暮らしが「尾道スタイル」として残っているところがあると感じます。2キロ四方の中心市街地で、ハウスメーカーの住宅や新しい建築が目につかないのは、とても珍しいことだと思います。

「尾道空き家再生プロジェクト」の五つのコンセプト  
(空き家×建築) (空き家×環境) (空き家×コミュニティ)  
(空き家×観光) (空き家×アート)

これまでの暮らしの基盤にある「住まい」が「空き家」になって、その数が増えていった時、まっさらに新しく建て替えるのではなく、五つのコンセプトを考え、進行していくのはとても共感しました。

手間と時間はかかりますが、その過程において関わる人の多さや、プロセスを丁寧に進めていく中で気づくもの、それがこれからも「尾道スタイル」の大きな要素となるのでしょう。



### アートと地域 アート×よそ者×若者×ばか者

昔からこの地に住んでいた人たちが移住して来た人たち、かならずしもすぐに共生していくことはたやすいものではないのかもしれませんが、それらの場にアートを通して見てみるとアートが持っている多様性や幅広さや豊かさが「再生」というキーワードに連動していくように思えてきます。

### ONOMICHI DENIM PROJECT

ここ数年来、私が注目しているのが「尾道デニムプロジェクト」です。世界有数のデニムの産地である備後地方にある尾道。そこでここ尾道で働く人々、住職・農家・漁師・大工・繊維業・飲食業・保育士などなど幅広い業種の市民、そして市長も参加し、実際に新品デニムを1年間ワークパンツとしてはいてもらい、本物のユースドデニムを作るというもの。職種によってダメージ部分や色落ち具合の違いが出てきて、例えば保育士の場合よく膝について動くのでその部分が擦れたり、ある大工さんはロープを足で固定するため筋跡が出来たり、漁師さんは船上で潮風を受けるのでデニムが微妙に緑色に変化してきたりと1本1本に尾道の人のストーリーが詰まったオリジナルのジーンズとなります。尾道の環境と人と時間によって表現された作品となり、それを展示・販売されます。

### MEIJKAN 羽犬塚プロジェクト

私たちが行っている MEIJKAN 羽犬塚プロジェクトは、地域に繋がる街なかアートという切り口を持っています。今回の「尾道空き家再生プロジェクト」の取り組みは参考になることが多くありました。

アートと地域の資源を考え、もの事を行っていく中で Try and Error を繰り返しながら人とのつながりや、プロセス過程を丁寧に進めていくことで気づくことの積み重ねはとても重要なことだと思います。

## 記録すること・アーカイブすること

穴瀬 聖 (学生)

### 尾道

尾道市では、尾道 空き家再生プロジェクトについてのレクチャーとフィールドワークを行った。国内外より様々なジャンルで活動するアーティストを招いて開催している「AIR Onomichi」と題したアーティスト・イン・レジデンスでは、尾道固有の傾斜地に点在する空き家や空き地を活かした活動を行っている。空き家再生プロジェクトは物件再生や情報提供などを通して AIR Onomichi をサポートしている。AIR Onomichi に参加するアーティストは、一般的アートプロジェクトにみられる公募制でなく、AIR Onomichi のメンバーが参加アーティストを厳選する方式を取っていることを聞き新鮮に感じた。全く知らないアーティストと新しく何かを生み出すことも可能ではあるが、尾道を知っている人や関係者の中から繋がりのあるアーティストからこそ、面白いものが生み出せるのではないかと考えたことから、公募制は行っていないという理由がわかった。

レクチャーは、光明寺会館 AIR Cafe にて行われたが、そこでは AIR zine (小冊子) の発行や販売が行われていた。コンセプトは、「放っておけば無視されたり朽ちてしまうようなものを言葉にとどめ、記録すること」。毎回、漢字1文字の1つのテーマを定め、その文字にまつわる物事をまとめていく。空き家を再生していくにあたって、尾道の街を見つめ発見するものを通して、漢字1文字の1つのテーマを元に zine の内容も構築しているということを知った。ただ、この zine は観光客など県外から訪れた人には手に取ってもらえるが、意外にも尾道在住の人には、それほど手に取ってもらえないという現状があることを知った。これは、佐賀で同じように紙媒体を発行したり、プロジェクトを行う時にも、同じようなことが言えるのではないかと感じ、どのようなアプローチをすれば、住んでいるその土地の人に知ってもらい、手に取って(プロジェクトであれば参加して)もらえるのかについて考える必要があると感じた。

### 鞆の浦

鞆の津ミュージアムにて、広島県知的障害者福祉協会 文化・芸術活動の部 主催の展示会『どや、〇〇じゃろ!』展が行われていた。展示室とは別に作業場と書斎兼ショップになっている部分があり、これまでの展示に関する資料や作品の販売が行われていた。

ミュージアムショップにて、みずのき美術館・鞆の津ミュージアム・はじまりの美術館の方々によって編集された『どうしようからはじめる アーカイブ 作品を記録し、伝える方法』という冊子を購入した。3つの美術館が障害者支援施設での活動を通し、アーカイブとは何か、どのように行っていくのかなどについて、作品・プロジェクトを含めて記録している。鞆の浦ミュージアムではこのような記録集を年に2冊のペースで作っているとのことだった。今回の冊子を手にとったことで、展示や取り組みをこのように冊子などの形に残すことの重要性を再確認した。

### 今後の活動について

今後の活動では、プロジェクトや展覧会に向けて準備や打ち合わせを含み、本番までの流れや進捗状況、その時々生まれた疑問・課題やその解決策などを適宜記録して残し、振り返った際にわかりやすく、そのプロジェクトについて全く知らない人にとってもわかりやすくあるような記録をしていきたい。記録はセミナーで扱った「評価」にも関わってくるものだと思うので、自分なりにアートプロジェクトの評価について再考しつつ、どのような記録が評価につなげやすいかどうかについても考えながら活動を進めていきたい。



展覧会『オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室』 事前準備

現地リサーチ

2019 5.9木  
6.20木 7.29月

場所 佐賀県有田町

アートマネジメントミーティング  
プロジェクト説明会

2019 8.24土

時間 10:00 ~ 15:00  
講師 オレクトロニカ  
加藤亮 + 児玉順平 (美術ユニット)  
佐々木元康  
(特定非営利活動法人 灯す屋 代表理事)  
会場 佐賀大学有田キャンパス  
泉山磁石場  
bowl  
旧しらかわ保育園  
出席者数 12名



売茶翁アートカフェプロジェクトとは

「売茶翁」(※ p.68 参照)と「アートカフェ」(※)をヒントにしたアートプロジェクトである。前年度に引き続き、地域住民と自然に日常と非日常の領域の中でアートの磁場を立ちあげる美術ユニット オレクトロニカ (加藤亮 + 児玉順平) を招聘した。

アートマネジメントミーティング

2019 7.18木  
9.19木 10.17木

時間 19:00 ~ 20:30  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部 1号館  
アクティブラーニング室  
出席者数 15名

※アートカフェ：SMAART が思い描くアートカフェとは、表現者たちを引きつける磁力を持ったマスターを中心に、アーティストやアートファンのたまり場、あるいは展示スペースに飲食スペースがあるもの。



プロジェクトに向けての事前準備

11月に佐賀県有田町にて実施するアートプロジェクトに向けて、オレクトロニカは5月より計3回の現地リサーチをおこなった。8月24日には受講生に向けてプロジェクト説明会および有田町の見学をおこない、オレクトロニカのプロジェクトプランの説明を受けるとともに、有田でまちづくりに関わっている佐々木元康氏を講師にむかえ、地域の現状や特性について学んだ。有田町見学では、オレクトロニカがピックアップした場所を実際に訪れ、現地の人の話を聞くことにより、アートプロジェクトを地域で実施することの意義について再確認する機会となった。



プロジェクト説明会



アートマネジメントミーティング

受講生は自身のテーマをもとに、「広報」「アートカフェ」「会場」の3つのグループに分かれた。7月より3回実施したアートマネジメントミーティングでは、各グループで必要なことを話し合い、オレクトロニカや事務局とも相談しながら準備に取り組んだ。また、メーリングリストを活用し、オレクトロニカ・受講生・事務局間で情報共有をおこなった。この中で、受講生はアートマネジメントについて多くの知識やノウハウを習得することができた。(吉村)



アートマネジメントミーティング

SNS を活用した広報活動

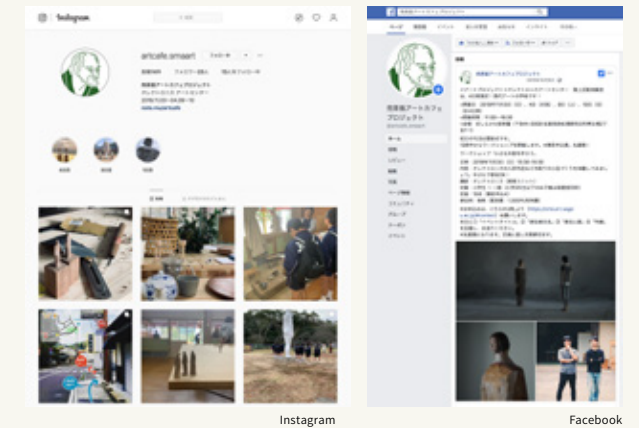
Facebook や Instagram などの SNS を活用し、会期中もイベントの様子をライブ配信するなど、受講生は様々な工夫をおこない発信した。

Facebook @artcafe.smaart

Instagram @artcafe.smaart

Twitter @ArtcafeSmaart

note 売茶翁アートカフェプロジェクト



Instagram

Facebook

ハンドアウト・道路案内

会場図や看板は受講生が作成。それぞれの得意分野をいかして活動をおこなった。



ハンドアウト表

道案内看板

アートカフェ事前準備

アートカフェではオレクトロニカの作品を模した落雁をつくることになり、落雁の型をオレクトロニカが制作し、材料や製造手順をカフェ担当の受講生が考えた。



★

★



展覧会『オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室』



2019 11.  
3日 4月祝 9±.10日

時間 11:00 ~ 16:30  
会場 旧しらかわ保育園  
招聘アーティスト  
オレクトロニカ  
加藤亮・児玉順平(美術ユニット)

来場者情報

〈来場者数〉  
計 146 名  
11/3: 33 名 11/4: 31 名  
11/9: 27 名 11/10: 55 名

〈地域〉  
佐賀県内 116 名  
県外 24 名

佐賀県有田町の旧しらかわ保育園にて「路上活動実験室」をテーマに4日間限定の展示「オレクトロニカアートセンター」を行い、SMAART 受講生は「カフェ」「広報」「会場」の各担当に分かれアートマネジメント実践に取り組んだ。



「作品展示室」ではオレクトロニカのこれまでの活動から「路上」に関連する作品群や記録写真を紹介。



「カフェ室」は飲食を交えアートに触れる機会を提供する「売茶翁アートプロジェクト」の核となる場として、オレクトロニカと相談しながら、茶・菓子の選定から提供時の工夫まで受講生カフェ担当グループが主体となって取り組んだ。





イベント

● 2019.11.3日

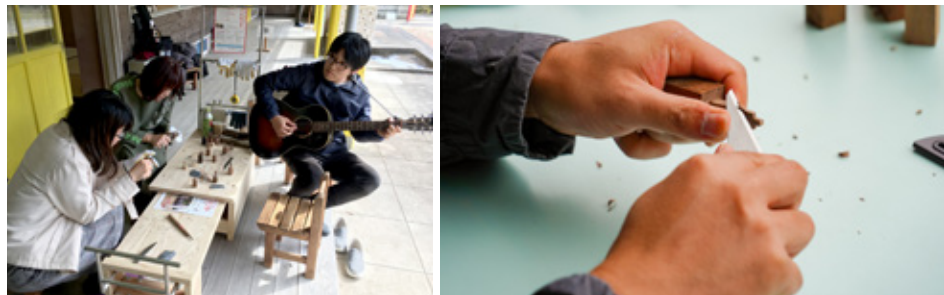
時間 13:30 ~ 15:30  
●ワークショップ  
小さな木彫をつくろう!  
参加人数 6名



● 2019.11.4月祝

時間 13:30 ~ 14:00  
●トーク  
大分・竹田の路上にて  
参加人数 5名

時間 14:00 ~ 15:30  
●ワークショップ  
インスタレーションに挑戦!  
参加人数 9名



● 2019.11.9土

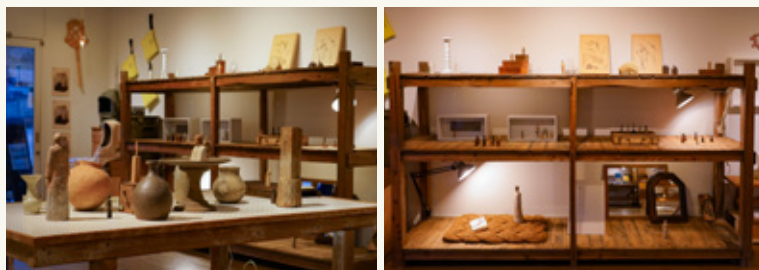
時間 13:30 ~ 14:00  
●トーク  
佐賀の路上にて  
参加人数 10名

時間 14:00 ~ 15:30  
●観客参加型イベント  
路上と本を愛する人のためのビブリオシェア!  
参加人数 10名



● 2019.11.10日

時間 13:30 ~ 15:30  
●観客参加型イベント  
私たちの路上表現!  
参加人数 5名



関連展示

Olectronica exhibition 「机上の彫刻展」

10月31日(木) ~ 11月10日(日) 12:00 ~ 18:00  
会場: bowl  
佐賀県西松浦郡有田町本町西 1054

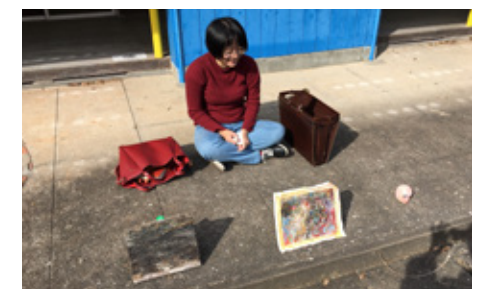


「図書室」では佐賀大学芸術地域デザイン学部6名が「路上」をテーマに選書した書籍約50冊を展示。会期中、同6名が各自選んだ書籍から1冊ずつ口頭で紹介するイベント「ビブリオシェア」を行った。



会期中、図書室でのイベントの他、オレクトロニカが大分や佐賀で行った路上活動についてのアーティスト・トーク、小人形作りを体験できる木彫ワークショップ、園内の気になる場所に小人形を配置するインスタレーション体験、敷地内で「路上」をテーマに各自表現を行う自由参加イベントを行った。

路上をテーマとしながら山上の奥地に場所を構えることに当初不安も感じていたが、旧保育園という場の力もあって終始穏やかな空気に包まれながら、路上に出る前の実験、練習、吟味に取り組みました。地元有田町からはもちろん県外からの訪問客も多く来られた。(花田)





## オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室 レポート

森 恵 (一般 / アートカフェグループ)

### 素晴らしいメンバー集結、残された自分自身の課題

今回のオレクトロニカアートセンターでは、とてもいいカフェグループに恵まれたと感謝し、メンバーの一員に加えていただけてよかったと心から思っています。8月に有田でキックオフ。忙しい日常を抱えた6人のメンバーは、時間的にも距離的にも制約が多い中で、それぞれができることに精一杯取り組むことができました。プロジェクト開催前に6人全員が顔を合わせたのは2回だけ。グループラインで細かく打ち合わせを進めました。昨年の経験者からの話を参考に、そこからの進化系としてプランニングした、ハーブをブレンドした緑茶と紅茶。売茶翁アートカフェプロジェクトにふさわしい嬉野産の茶葉にこだわっておいしく仕上げることができました。お茶菓子も、昨年の例を踏まえて、個包装の佐賀県産の煎餅をセレクト。自分達の中では、予算内で理想的なスタイルができあがったと思っていました。

そうしたところに、オレクトロニカさんからリクエスト。オレクトロニカオリジナルプレートへの挑戦というミッションが与えられました。まず、ネックになったのは、予算と人型のオリジナルスイーツづくり。しかし、メンバーで知恵を出し合い、なんとか完成させることができ、オレクトロニカプレートを目当てに来場される方もいて、多くの方が写真に収めて帰っていかれました。事務局のご指導とサポート、メンバーの努力とチームワークで、カフェ自体はうまく運営できたのではないかと考えています。今回、カフェの運営を経験できたことは大きな収穫になりました。

自分自身の反省としては、アートマネジメントという意識の欠如です。アーティストの作品、メッセージ、コンセプトなどをはっきり理解していたか、咀嚼できていたかどうかは疑問に思われます。オレクトロニカさんの活動、作品、魅力などをしっかり把握して、来場者にアピールできるレベルまで持って行って臨むべきであったと思っています。細部から全体に至るまで、理解した上で考えて行動するというのが理想。目の前のタスク、お茶を出すということはできましたが、オレクトロニカさんのアートやプロジェクトのおもしろみを伝えるというまでは至っていませんでした。

### アートマネジメントとは？ 学びから次のステップへ

展示会実践という今回の大プロジェクトで得たものは、アートマネジメントとはどうあるべきかという自分なりの見解です。マネジメントとは、マネジメントの目的とは、マネジメント役割とはを考えると、向き合うことができたことです。基本に立ち返って考えたいというのが、今の実感。あらためて調べてみると、マネジメントの目的は、「設定した目標に沿って組織を運営する」こと、マネジメントの役割は、「組織の目標・案件・プロセスを管理すること、組織の目標を達成すること」とありました。今後、自分としては、まずアーティストの魅力を理解して、アーティストに惚れ込むことからスタートし、目的や役割を果たせるように近づいていきたいと思っています。

また、今回、感じたのは、アートマネジメントはとてみたいへんな仕事、時間と手間とエネルギーが求められるということです。今回はわからないままに、部活のような気分で充実していました。でも、実際に主体的にプロジェクトを運営するとして、どのような楽しみや喜びが感じられるのだろうか、やりがいはあるのだろうかと考えました。やはり、そこで重要になってくるのは、熱い思い。自分を突き動かすのは、人を突き動かすのは、熱い思いではないだろうかということです。そして、アート、自分がいいと思うものを伝えていくには、やはりコミュニケーションが大事。コミュニケーションの重要性を強く感じました。

本プロジェクトを通して見えてきたのは、パラパラと月日を重ね、パラパラと思いつくままにいろいろなことをしてきた自分自身のこと。そろそろ、本気で自分自身と向き合い、まとめる時期にきたのではないかと感じ、自分自身の方向性を明確にしたいと考えました。また、今回は、予算があつたプロジェクト。何もなかったら、いかにお金を生み出すか、生産性を上げていくかというのも課題だと思います。

今後は、今回の経験を糧に、自分の思いを伝えるために「路上に出る！」ぐらいなんてことはない、そんな勇気を持って、アートを、人生を楽しみ、社会貢献にも取り組んでいきたいです。

## オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室 レポート

小林 愛恵 (学生 / アートカフェグループ)

### プロジェクトで得たもの、プロジェクトを通して見えてきた自身の目標や課題、またそれを今後どう活かしていきたいか

このプロジェクト内では、事務のような役回りでしたが、チームメンバーを陰で支える事に尽力しました。ディスカッション内容のまとめや、備品リストを作るなど、それを基にメール内でアーティストとアートカフェに対する意見交換をしました。その後、改めて振り返りを行う際に用いられていたため、円滑に事業を進められていたのではないかと思います。しかし、事前準備として一番重要になるのは、アートカフェというはっきりと概念が存在しないものを作り出すために、自分たちが何をしたいのかははっきりと意見を出すこと。社会人の方々はそれらが明確で、私には考えつかないようなアイデアを次々と出していき中、自分ではなかなか柔軟に考えられなかったことが心残りとなりました。

運営初日は、全員がどのようにお客さんにお茶を注いで、出すのかというイメージの共有ができていなかったことからばたついてしまい、お客さんと会話する余裕を持てずにいましたが、簡単なマニュアルを作成し、一人ひとりが何をすべきかを書いた役割の分担表を作ることで立て直しを図りました。意見交換などはメールの文章などで伝えられますが、手順のイメージはなかなか想像しづらいものなので、一度全体で集まってシミュレーションしておきたかったです。カフェの流れを整えた後は、お客さんといろいろなお話ことができました。全体的に有田町民の方々や会場の近隣に住む方が多い印象で、回覧板から情報を仕入れたという方もいらっしゃったので、有田のコミュニティの中で情報が回る道筋に特徴があるのではないかと考え、今後有田を拠点として活動する際に活かせるのではないかと考えました。

### 感想

昨年の SMAART の事業に引き続き、今年もアートカフェの活動をさせていただきましたが、昨年とは人数も場所も内容も異なり、また新しいアートカフェの形を作り上げることができたのではないかと思います。昨年は地域の中でプロジェクトを展開することで、売茶翁のことや、アートの形について考える機会となればよいのではないかと、お客さんにお茶を振舞っていましたが、一番の胆となるお客さんとのコミュニケーションがあまりできていなかったと感じていました。また、人数も少なく、アートカフェという未知のものを創る立場になって、何をすべきかが良く分かっておらず、開催直前ぎりぎりまで資料作りや意見交換会が行われていました。このことから、何を目的に事業を行うのかを自分自身の中ではっきりさせることや、事前準備の大切さを学び、今回ではその経験を活かすことに努めました。その結果、今回は事前準備の段階から、チーム内で自分が何をすべきなのかと全員が模索し、活発に意見交換を行えたことで、今年のチームメンバーにしか作れないアートカフェが形成されていったと思います。二年間の活動を通して、アートカフェとは何かについて考えてきましたが、現在の私が考えるアートカフェとは「アートという抽象的で人によって異なる見え方、とらえ方ができるものについての理解を深めるために、「食」という日常的にほぼ全ての人がかかる行動を媒介として、コミュニケーションを生むきっかけをつくる役割を果たしてくれる場所」ではないかと考えています。そういった場所を作るために、次の事業で何ができるのか、前回できなかったことをどのように活かすかをこれからも考えながらまた参加したいと思いました。



## 展覧会『発生の場 / Ignition Field』 事前準備



アートマネジメントミーティング

2019.11.21\* 12.19\*

時間 19:00 ~ 20:30  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部1号館  
会議室  
出席者数 14名

オレクトロニカアートセンター終了後まもなく、年明けに行われる展覧会「発生の場」の準備を開始した。今年度は二つのアートイベントを実践の場として活動することになるが、無の空間から作り上げた前回とは異なり展覧会の会場としては王道ともいえる「美術館」での開催とあって様々な面で切り替えが必要なようだ。まず「自己テーマ」の見直しから行った。これまでの反省を踏まえ「発生の場」ではどのように関わっていきたいのか再考することから始めた。テーマを変えた受講生もあり、貫く姿勢の受講生もあり。中でも変化が大きく見られたのは「アートカフェ」だ。オレクトロニカアートセンターではアーティストと共に半ば作品化されたメニューが並んだが、今回はテーマを「語らいの場」と位置づけ、来場者とアートについて、展覧会について語らう場を設けることとなった。

このほか、会場、広報と3つのグループに分かれた受講生は少ない時間の中で準備を進めていくことになる。(緒方)

### 美術館研修 2019年11月30日(土)

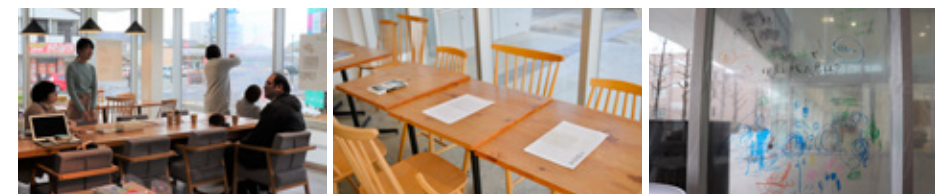
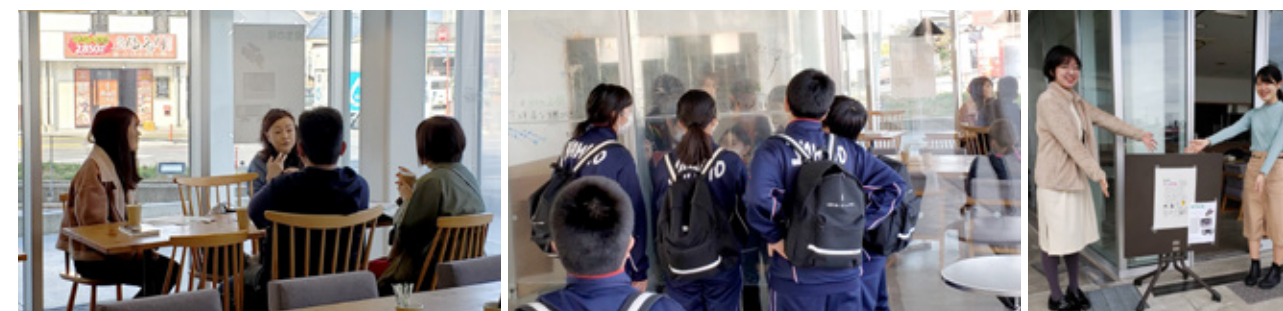
「発生の場」準備期間中、長崎県美術館で行われていた企画展「クリスチャン・ボルタンスキー — Lifetime」のスクールプログラムに参加した。ここでは会期中の企画展を通して学芸員の動きや作品解説の仕方、またバックヤードにて展示の舞台裏まで学ぶことが出来た。受講生にとっては「美術館」という共通の空間で行われている展覧会の裏側を学べたことで「発生の場」での活動の参考になったに違いない。(緒方)

関連記事

クリスチャン・ボルタンスキーの世界をたどる 長崎県美術館で回顧展  
江口博子 <https://potari.jp/2020/01/3855/>

クリスチャン・ボルタンスキー — Lifetime

会場：長崎県美術館  
会期：2019年10月18日(金)～2020年01月05日(日)



### アートカフェ

鑑賞者が受け身になってしまいがちな展覧会という場に少しでもアウトプットする空間を作りたいという思いから、今回アートカフェの企画を考えていきました。その中でスタッフは、同じ展覧会を見た鑑賞者として、参加者の中に眠っているものの言語化を促進するファシリテーターとして会話することによって、いい役割を果たせたのではないかと思います。過去の参加者が話してくれた作品に対する解釈を伝えることによって「いや、自分は違ってこう考えるんだけど…」と他の参加者が自分の考えを説明することの助けになったこともあり、面白い体験の助けになることができたのではないかと感じました。

(受講生 安原彩絵)

発生の場のカフェではアートを語る空間が重視され、カフェ側と来店される方との会話があることでコーヒーやお茶だけでも十分に満足して頂けるものとなりました。(受講生 江口博子)

観覧者に、ガラス面にテーマなどのもと自由に書いてもらうのは、鑑賞した直後のまだ言葉にまとまらない状態の素直な感覚を表すのにはいいと思った。(受講生 徳永幸治)

お客さんが展覧会を見て考えたこと、感じたことを堅苦しくならず、気軽に共有できるような空間にしたいという意見から、ガラスの壁面にビニールを張り、誰でも自由に感想などを書くことができるスペースを設けることにしました。壁面の場所によってあらかじめテーマを設定することによって、誰でも書きやすいように、また書くことへのきっかけになるように工夫しました。また発生の場の展示では現代アートを扱ったので、参加アーティストについての資料や、展示内容や現代アートに関連する文献や雑誌などを準備し、飲み物を飲みつつ作家や展示についてより興味を持ってもらえるよう工夫をしました。アートカフェ会場は少し離れていたため、立ち寄っていただくために案内チラシを作成し、展覧会受付にて展示解説などとともに来館者に配布しました。案内チラシはアートカフェの概要や目的について、イラストと文章でわかりやすくまとめました。

(受講生 穴瀬聖)

### 来場者の声 アンケートより



娘とのんびりおえかきもできて、ほっとできてよかったです。なかなか話を共有する人がいないのはホントなので、常時いつもお話できるといいですね。アートカフェのちらしもかわいくて、たしみやすかったです。

落ち着いた雰囲気の明るい空間でとても気持ちよいひと時を過ごすことができました。





## 展覧会『発生の場 / Ignition Field』

### 会場づくり

「発生の場」では受講生の多くが設営から撤収まで会場づくりに関わった。アーティストの展示補助、来館者への配布する「ハンドアウト」の制作、案内板の設置、美術館看板の設置、またスタッフのための「作品解説」に至るまで受講生が主体的に活動を行った。「作品解説」はハンドアウトとは異なり受付スタッフが来館者に正しい作品解説が出来るよう仲間に贈ったいわば「カンニングシート」である。この作成にあたり、緊張な面持ちでアーティストに作品解説を求める受講生の姿が印象的であった。実際、この「カンニングシート」のおかげで多くのスタッフが救われることとなった。(緒方)



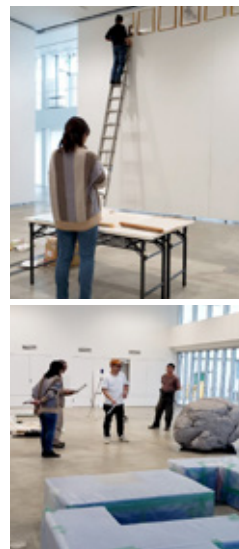
ハンドアウト



「発生の場」の準備作業の一つとして、アーティストトークの内容を元にスタッフ用カンニングシートの作成を行なった。鑑賞者がアーティストから投げかけられる問いやテーマについて考えを深めるためにもマネジメント側が作品理解を行うことの重要性を改めて感じながら作成することができたのではないと思う。また、アーティストトークだけでなく、設営期間中は作業を手伝う中で、アーティストから直接作品について説明を受けたり質問をしたりする機会もあり、設営期間を単純に「準備するための時間」として捉えるのではなく「作品への理解を深める時間」としても過ごすことができた。しかし、手伝う時間が長かったアーティストからは様々な話が聞けたのだが、あまり話せなかったアーティストもいて作品理解の程度にムラがあったという点で反省点があげられる。

(受講生 別府菜々子)

会場係が何をすべきか、その時その時に自分が何をすべきかを考えながら行動するように心がけた。会場が整うように努力した。アーティストの方々を理解しようと努めた。(受講生 森恵)



ゲストアーティスト展示

2020.11.11 ± -26日

時間 10:00 ~ 17:00  
会場 佐賀大学美術館

ゲストアーティスト

福田 篤夫 / 上村 卓大  
鈴木 淳 / チェ・ヨンファン

協力キュレーター

セオ・ジュノ

来場者数 428名

関連イベント

#### ●アーティストトーク

2020.11.11 ±

時間 13:00 ~ 16:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
教養教育1号館111室  
参加人数 30名

#### ●オープニングレセプション

2020.11.11 ±

時間 16:30 ~  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部2号館

#### ●アートカフェ

2020.11.11 ± .12日  
13月祝 .25 ±

時間 10:00 ~ 16:00  
会場 佐賀大学美術館併設の施設  
来場者数 50名

#### ●学生展示

2020.1.8 水 -13月祝

時間 12:00 ~ 18:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部2・3号館

#### ▶ 発生の場 Web サイト

<https://ignitionfield.wixsite.com/index>

#### ▶ 発生の場 Facebook

<https://www.facebook.com/ignitionfield/>



SMAART2019年度活動の締め括りとして2020年1月に佐賀大学美術館にて展覧会『発生の場 / Ignition Field』(ゲストアーティスト展示)を行った。会場を大きく3室に区切り、芸術地域デザイン学部教員の柳健司・土屋貴哉・花田伸一が1室ずつ担当し、それぞれゲストアーティストを招聘する形でのグループ展。柳が福田篤夫氏(群馬県在住)、土屋が上村卓大氏(福岡市在住)を招聘。花田は「Aesthetic Dialogue」とのテーマのもとセオ・ジュノ氏(キュレーター/韓国ソウル在住)の協力を得ながら鈴木淳氏(北九州市在住) + チェ・ヨンファン氏(韓国ソウル在住)による日韓二人展をセッティングした。

その舞台裏のマネジメント実践に取り組む SMAART 受講生たちは、11月の『オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室』と同じく会場・広報・カフェの3グループに分かれ活動。会場グループは設営・撤去の作業補助、配布資料や会場内サインのデザイン、開館時・閉館時の会場オペレーション指示書の作成などを担った。広報グループはSNS等での情報発信など。カフェグループは展覧会鑑賞後の観客を美術館に隣接する臨時カフェへ誘導し、ドリンクを提供しながら観客に感想を話してもらったり、ガラス壁に感想を書いてもらったりした。

細部まで綿密に計画を立て一定の目標に向かって効率よく合理的に物事を進めるのを良しとする事業に慣れた人には、現場の状況やスタッフのマンパワー等に応じて展示プランやスケジュールが次々と変更されアレンジされていく現代アートの進め方は奇異ものに思えただろう。このような現代アート特有の臨機応変かつ縦横無尽な進め方はなかなか座学では伝わらない。今回の実践を通じて現場でしか得られない新たな気づきを受講生が多く得たであろうことを切に願う。(花田)



アーティストトーク



鈴木淳 作品



《そこにそこ あしがみえる》



《わたしはあなたになる、あなたはわたしになる》



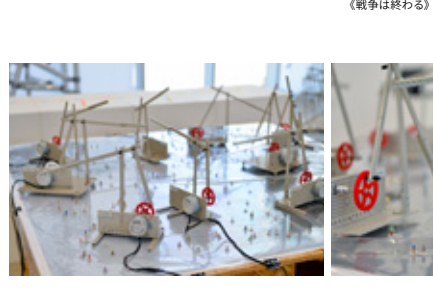
《震える扇風機》



《動物々交換園》



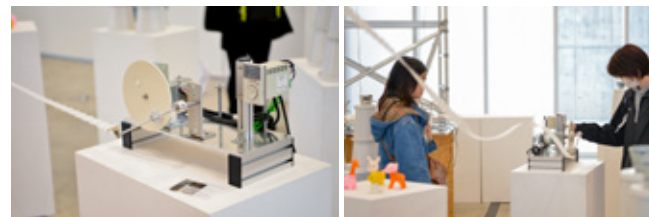
《戦争は終わる》



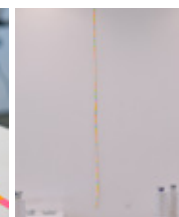
《逆発電所》



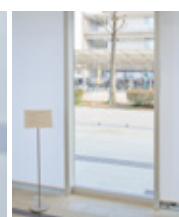
《蕎麦猪口「楼閣山水」コレクション》



《波風を立てる》



《付箋を付箋する》



《いきのこし》



《だけなんなん ふと》



《だけなんなん 399 壁の向こう》



《はななふぶき》

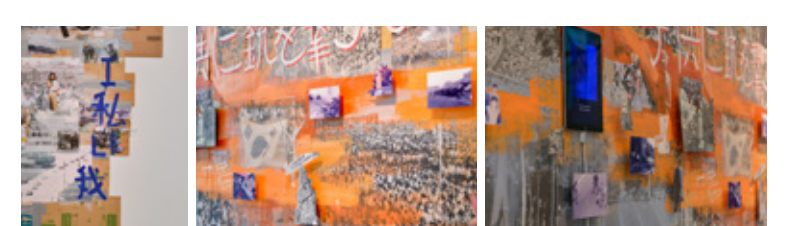
チェ・ヨンファン 作品



《私達は何のために戦っているのか》



《私達は何のために戦っているのか》





福田篤夫 作品



《colour and/or monochrome 2020》

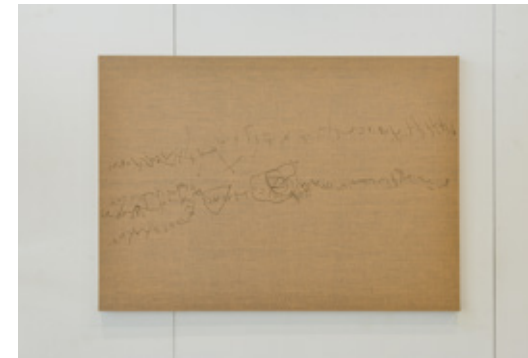
上村卓大 作品



左上《20171218.jpg》 左下《展示模型に置かれた彫刻のマケット》 右下《たなばたさまの譜面》



《無題 (20171218)》



《無題 (たなばたさま)》



《2010年のクレートの角》

《タイトル未定》



《聖者の行進 (右利きの楽団)》





『発生の場／Ignition Field』 レビュー  
穴瀬 聖

2020年1月11日(土)から佐賀大学美術館にてはじまった展覧会「発生の場」では、鈴木淳、チェ・ヨンファン、福田篤夫、上村卓大の4人の作家が展示をしている。

鈴木氏は映像や写真や磁器コレクションを使ったもの、体験型のものなど様々な素材やジャンルの作品を展示している。チェ氏は「共同体の中の個人」に焦点を当て、様々なデモの様子を素材とした作品を展示している。壁一面を使った展示は作品のメッセージをより強調させるものになっていると感じる。福田氏は金箔や銀箔や漆と和紙を素材にした作品を展示している。暗めの展示室の中に隙間から自然光が入ることで、同じ作品の配列でありながら様々な表情を見ることができる。上村氏の作品で印象的なのは、自身のお子さんが作ったものをもとにサイズを拡大制作されている作品だ。実際にお子さんが作ったものも展示されており、大きさの差を比較しながら鑑賞できるようになっている。

会場である美術館横のスペースでは、「発生の場」展示期間中の週末に「アートカフェ」を行っている。作品を見て思ったこと、感じたことを飲み物で一息しながら、ゆっくりと語り合える場作りをしている。アートカフェ内のガラス張りの壁面には、ビニールを張り感想やイラストを自由に書くことができる場所を設け、これまで展示を見た人やアートカフェに立ち寄った人との感想が共有できるようになっている。発生の場の展示受付でアートカフェについてのチラシを配布しているため、カフェに立ち寄ってくれる人も多い。大学の近くに住む方、遠くから夫婦でいらっしゃった方、大学で制作する学生や学生展示を見に来た親御さんなど、様々な層の方が訪れた。アートカフェ3日目に小学生が3人、展示会場とカフェを歩き来していた。親に連れられて来たのではなく3人だけで来たようで、休日行く場所の選択に美術館があることがすごく新鮮で嬉しく感じた。展示についてどうだったか聞くと、いまいピンと来てなかったようだが、カフェ内の壁面に好きなように絵を描いていて楽しそうだった。佐賀大学美術館が周辺の子ども達にとって、公園に行くような感覚で訪れてもらえるような場所になればいいなと感じた。

平日の午前中、発生の場の展示の受付をしていたところ、視覚障害者の男性が展示を見に来られた。白杖を持たれていたのが気になったが、これまで展覧会場で、見るのが不自由な人がいる場面に触れたことがなく、失礼ながら「見えにくい人・見えない人も美術館に来るんだ」と言う事実に対する驚きと、自分はどうか対応すべきなのかわからず何もできずにいた。どれくらい見えるのか、そもそも受付の自分は見えているのか、声をかけるべきか、資料を渡してもいいのか、見えないのに渡しても失礼ではないか、と考え込んでいるうちに資料は渡せないまま、その方は展示室へ向かわれた。男性は展示を一通りまわられてから、「すみません、今ここではどんな展示をしているんですか？」と私に声をかけてくださり、ここで初めて受付の自分が見えていることに気づいた。私は展示をうまく説明できる自信がなかったが、作品の解説を申し出た。男性は視野が狭く弱視であること、ぼんやりとした視界であるが明暗はわかることなどを教えてくださった。作品を説明しようとするが無意識に「見てわかる」ことを前提に話してしまうことに気づいた。どう伝えたらわかりやすい説明になるのか、自分も探りながら解説をした。それと、これは誰に対して解説をするときにも言えることだが、自分でちゃんと作品について理解していない人に説明することが難しいということに改めて気付かされた。この時は資料があったのでなんとか一通り説明できたが、なかった場合はできていなかったと思うし勉強不足だったのを悔しく感じた。また、作家や作品の解説をしながら、この展覧会がSMAARTというプロジェクトの一環であること、自分は学生として関わっていることなどもお話しした。男性から「これまでも何度か佐賀大学美術館に来て展示を見たことがあるが、展示内容がよくわからないまま帰っていた。今回初めて声をかけて解説をしてもらえて良かった」と言っただき、拙い解説だったが役に立つことができとても嬉しく感じた。福田氏の作品の、銀箔の反射や立体感のおもしろさについての感想もいただいた。男性が美術館に入ってきたときに、すぐに自分から声をかけられなかったことを悔しく感じたが、展示がわからないまま帰らずに自分に声をかけてくださった男性に、自分からも感謝の気持ちでいっぱいになった。今回の体験を通して、自分の中での展覧会の見方と関わり方が変わったと思う。

『発生の場／Ignition Field』 レビュー  
安原 彩絵

佐賀大学美術館は2013年に開館した全国にも珍しい国立大学の美術館である。地域に根ざした美術館としての運営を行っており、特別芸術に関心があるわけではないが散歩のついでに立ち寄るといった市民も少なくない。

そんな佐賀大学美術館で今回開催された「発生の場/Ignition Field」は、ゲストアーティスト4組と協力キュレーター1名による、同館初ともいべき現代アートのみで構成された展示だ。館内に入るとすぐに目を引くのは、受付カウンターの前足元に設置されている鈴木淳氏の映像作品《そこにそこ あしがみえる》。モニターに映し出されたプラプラと動く足は、カウンターに座る職員の本来見えるはずのない足のように見え、私たちの感覚を揺さぶる。第1展示室ではチェ・ヨンファン氏の作品《私たちは何のために戦っているのか》が鈴木氏の対面壁一面を埋める。「共同体の中の個人」に着目したチェ氏の作品には写真のコラージュの他に複数の言語で言葉が書かれており、「個人」の切実なメッセージが伝わってくる。福田篤夫氏の作品では、アルミニウムに貼られた金箔が薄暗い展示室の中で外光を反射し儼かに輝く《colour and/or monochrome 2020》が印象的だ。漆や銀箔など日本の伝統的な素材を用い、すべての作品を四角かそれを曲げたもので構成する展示からは、福田氏が探ってきた今日の日本美術を体感できる。一方、「静」を感じる福田氏とは対照的に、上村卓大氏は自身の子供が作ったものを拡大した作品を中心に、社会の中で生活しながら制作するというで生まれた「動」の気づきを感じさせる。《聖者の行進(右利きの楽団)》は別の作品で使った方眼紙とカッティングシートの余った切れ端を使っており、制作の途中で自身の子供から得た気づきによって、制作し始めた頃とは違った方向へと展開していったようだ。

また、美術館の隣に位置する空きスペースではアートカフェが計4日間開かれた。温かいお茶やコーヒーを飲みながら、感想を語り合ったり関連書籍を読んだりしてもらえる場所だ。カフェの壁面には感想のかけるスペースが設けられている。鑑賞を通じて芽生えた思いをその場でアウトプットしてもらうことによって、参加者の中により展示を落とし込んでもらうおうというねらいである。カフェではスタッフが同じ展覧会をみた鑑賞者として、参加者の内に眠っているものの言語化を促進するファシリテーターとして会話することによって、考えを深めることの手助けをしている。

今回の展示は現代アートということで、いつもの調子で立ち寄った地域の方や現代アートに抵抗感を感じている方にとっては戸惑うことも多かったかもしれない。実際アートカフェを訪れて、どう解釈すればいいのかわからないと口にする人もいた。しかし一口に現代アートといっても、4人の展示はテーマとしているものも、作品の素材も、設置の間隔もそれぞれ大きく異なる。一つの展覧会で様々な形のアートに触れ、様々な切り口から解釈できるのだ。一つ一つの作品の判読に困った人も展覧会全体から感じたものは大きく、カフェでそれらを整理することによって、考えがもっと豊かになっていったように感じた。地域に開かれた美術館である佐賀大学美術館。今回の一連の企画で、その特性を生かしたさらなる可能性が芽生えたのではないだろうか。



## 受講生の声



自身の作りたいアーティスト・イン・レジデンス、アートカフェそれらの糸口として、知識だけでなくこの活動で出会った方々との繋がりを場づくりに生かしていきたいと思います。最終1年間、いちばん多くの学びと楽しさを頂き、深みのある1年間でした！

(30代女性)

実際に職場で生かせる部分が多い。振り返りのレポートを書くことで、自分なりに理解できた所や新たな気づきを得ることができた。

(50代男性)



イベントが開催するまで辛い辛い連続でも当日になると楽しい面白いが待ち受けていて非常に刺激的でした。

(20代女性)

もっと色々がんばれたのかな、という後悔の気持ちがあります。社会人さんたちと異なり学生という立場で、学校により近い場所にいたのもっと深く関わられたのではないかと思いました。

(20代女性)



SMAARTに参加していなかったら会う事がなかったと思われる美術業界の第一線で活躍する人の話を聞く事ができた。自分の力量や現段階での目標を確認する良い機会になったと思う。今後、自身の所属するゼミでの活動やイベント運営に関わる時に、マネジメントを学ぶ学生として今後の糧としたい。

(20代女性)

学ぶことが多く、自分自身の気持ちも徐々に変化していきました。

(20代女性)



次回のイベントに備え、今回の反省点を活かしたチェックリストを作成し、今後に活用したいです。また、会期中に各担当者がお互いのジョブを具体的・客観的に評価し合える場所・時間を必ず設けたいと思います。

(60代男性)

アートカフェに昨年から参加させていただきましたが、昨年の時点では何をして良いのか分からないと考えていたものが、二回目になるとどう対処すべきか自分の中で答えがわかっていると実感することが多く、活発に動けたのではないかと思います。しかし、今年は昨年と比べて人数が多かったため、本番の時点で人手は足りていましたが、アーティストと受講生との意見をまとめることがその分難しかったです。また、自分がこの活動に関わる中で何がしたいのかを社会人の方々にははっきりと示されているのに対し、なかなか自分の意見が出てこないことが心残りとなりました。ですが、その分自分のやれることを探し、実行できていたため、最終的にできあがったものに対する達成感は大きかったです。昨年と今年を通して、アートマネジメントにはどんな些細なことでも必ず問題の発生がつきものだと実感しました。それを一つひとつ解決して、自分の中でその解決策や対処などをストックとして溜めつつ、それを今後の活動に生かしていくことが大切なのではないかと思いました。

(小林愛恵)



## 受講生の構成

- 年代 20代：7名/30代：1名/40代：2名/50代：3名/60代：1 計 14名
- 職業 フリーランスコピーライター/県職員/会社員/スクールアシスタント/中学校教員/宿泊業福祉関係/大学生
- 地域 佐賀県：11名/福岡県：2名/長崎県：1名



モバイル・アート  
クリニック



## モバイル・アートクリニック

### ● 事前レクチャー

#### 2019.8.2金

時間 16:20～17:50  
講師 中ザワヒデキ (美術家)  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部 1号館  
A101 講義室  
参加人数 30名

#### 2019.9.6金

時間 16:00～17:30  
講師 椿昇  
(美術家 / 京都造形芸術大学 美術工芸学科教授)  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部 1号館  
A101 講義室  
参加人数 26名

#### 2019.10.18金

時間 17:00～19:00  
講師 鳥袋道浩 (美術家)  
会場 願正寺大広間 (佐賀市)  
参加人数 11名

### ● 武雄編

#### 2019.8.3土

時間 10:00～16:00  
講師 中ザワヒデキ (美術家)  
辛美沙  
(MISA SHIN GALLERY 代表)  
会場 ARTS ITOYA (佐賀県武雄市) /  
佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部旧 3号館  
受講生 5名  
聴講者 14名

### モバイル・アートクリニック事前レクチャー

各モバイル・アートクリニックをより充実したものにするべく、事前に美術家の講師によるレクチャーを実施。現場の第一線で活躍されている講師陣からより深くアートを学ぶ場を提供した。講師からは自身の表現活動について話がなされた。

### モバイル・アートクリニック

モバイル・アートクリニックは、受講生 (35歳以下の若手アーティスト) が自身の作品についてプレゼンテーションをおこない、それに対し講師がコメントやアドバイスをおこなう形をとった。

また、普段アートに出会う場所の多くは美術館だが、アーティストが育つ現場や磁場があることを知ってもらうため、モバイル・アートクリニックは佐賀県内のアーティスト・ラン・スペースにおいて実施した。



8/3 (土)、佐賀県武雄市にあるアートスペース「ARTS ITOYA」にてモバイル・アートクリニックがスタート。初回は美術家の中ザワヒデキ氏、MISA SHIN GALLERY 代表の辛美沙氏を講師として迎えた。

午前中は ARTS ITOYA にて 2名の受講生が、午後は佐賀大学において佐賀大学芸術地域デザイン学部学生有志の展覧会『3号館プロジェクト』から 3名の受講生がプレゼンテーションをおこなった。

講師は各受講生の作品を会話の中で紐解きながら、美術史や地域の歴史などをからめ、多様な角度から分析し、彼らの今後の制作のヒントとなる言葉を投げかけていた。



講師：辛美沙氏

講師：中ザワヒデキ氏

辛氏からはギャラリスト独自の視点として、作品を売買するという行為が持つ意義について語られた。作品を購入することは、アーティストにコミットするということであり、今後も応援していく行為になるという。

中ザワ氏は受講生に対し丁寧な質問をおこない、作品や受講生自身の考えを掘り下げていく姿が印象的であった。

2人からは共通して、美術史を知り、作品の本質が見えるまで制作していくことの大切さを述べられた。

### ● 多久編

#### 2019.9.7土

時間 13:00～16:30  
講師 椿昇  
(美術家 / 京都造形芸術大学 美術工芸学科教授)  
山下里加  
(アートジャーナリスト /  
京都造形芸術大学 アートプロデュース学科教授)  
会場 Art studio ボンドバ (佐賀県多久市)  
受講生 3名  
聴講者 11名



講師：椿昇氏



講師：山下里加氏

2回目のモバイル・アートクリニックは、9/7 (土) に佐賀県多久市の「Art studio ボンドバ」にて開催された。講師は、美術家で京都造形芸術大学の教授である椿昇氏と、同じく京都造形芸術大学の教授でありアートジャーナリストでもある山下里加氏。この日は3名の受講生がプレゼンテーションをおこなった。

椿氏は、アーティストとして生きていく方法や制作していくうえでいかなることにも向き合う覚悟、作品の分野の特徴や本質、現代のアートシーンから哲学に至るまで、具体的にわかりやすく話を展開。

山下氏からは、作品や言葉の端々から受講生の作品群にそれぞれ共通する点をすくい上げアドバイスしたうえで、前例がないような生き方を自分で発明していくことが、アーティストが一番やるべき仕事ではないかと話された。

ひとりひとりの課題や今後の方向性について様々な助言がなされ、受講生にとって次のアーティスト活動に繋がる回となった。



● 鹿島編

2019 10.19 ±

時間 10:30 ~ 17:00  
講師 島袋道浩 (美術家)  
 鷺田めるろ (キュレーター)  
会場 HAMASHUKU KURABITO  
 (佐賀県鹿島市)  
受講生 5名  
聴講者 9名



講師：島袋道浩氏



講師：鷺田めるろ氏

モバイル・アートクリニック最後の回は、10/19 (土) 佐賀県鹿島市にあるアートスペース「HAMASHUKU KURABITO」にて開催。講師は、美術家の島袋道浩氏とキュレーターの鷺田めるろ氏。

5名の受講生のプレゼンテーションを聞き、島袋氏は一貫して作品の見せ方について指摘。絵づくりや素材選びなどの細部で作品の印象がガラリと変わることを説明した。また、美術というのは有無を言わさないもの。いわゆる正しい答えよりも、その人にしかできないユニークな間違え方を提示することの方に意味があるのではと話された。

鷺田氏は、テクニックが先走っているところがあると指摘され、器用に作品風のものを作るよりも、自分にとって今つくっている作品はどういう意味があるのか、そこを大事にし、追求してほしいと話した。

受講生たちの問いに対して、講師のシンプルかつ明快な回答が印象的であった。反対に講師からの問いは何気ないものを感じたが、実はその作品の本質とはなにかを問いかけており、現場の第一線で活躍される凄さを実感することができた。(吉村)



スペース紹介



ARTS ITOYA

〒843-0022  
佐賀県武雄市武雄町大字武雄 7271  
運営者：松崎宏史

2018年にオープン。松崎氏は以前より福岡県糸島を拠点に海外アーティストのアーティスト・イン・レジデンスや糸島芸農というアートイベントをおこなっている。武雄のスペースでは、アーティスト・イン・レジデンスはもちろんのこと、こども、大人向けの絵画教室やプログラミング教室も行っている。



Art studio ボンドバ

〒846-0002  
佐賀県多久市北多久町大字小侍 703-21  
運営者：富永ボン

ボンで絵を描く現代アーティストとして活躍している富永氏が2014年に開設。スペース内には富永氏のアトリエ、作品やグッズ販売のショップ、BAR、展示スペース「えのぐアートギャラリー」がある。



HAMASHUKU KURABITO

〒849-1322  
佐賀県鹿島市浜町八宿乙 2688  
運営者：川崎泰史

川崎氏のアトリエ兼飲食スペース。2016年に佐賀の銘酒「鍋島」で知られる富久千代酒造の出資のもと酒蔵が改装されオープン。2019年から新しく器のブランドを立ち上げる。



## 受講生の声 アンケートより



コンセプトの考えが甘かったのを指摘して頂いたのは確かになと思いました。

8月3日(土) 武雄編 / 20代・学生

外部の人の話は新鮮だったし、知らない話を聞けてよかった。自分の方向性を考える参考になった。お金の話など現実的にやっていくことを話さけてよかった。

9月7日(土) 多久編 / 20代・学生



会全体が基本佐賀大学内部を意識されてか、内輪な空気がつらかった。講師の方が来てくださっているのに、プレゼン参加者、観客含めもう少し集める方法はなかったのかと考えました。

9月7日(土) 多久編 / 30代・アルバイト

その人にしかできないこと、有無を言わせないことという言葉が印象に残りました。自分にとってそれは何だろうと、これからもう一度考えていくことになりそうです。

10月19日(土) 鹿島編 / 20代・学生



## 聴講者の声 アンケートより



作家の作品意図を直接聞けるのは貴重であった。講師のコメントも二人の立場で(ギャラリスト、美術家)それぞれおもしろい視点で参考になった。

8月3日(土) 武雄編 / 50代・自営業

前回も大変興味深いお話だったが、今回はより作家の作品としてのこれからの方向性だったり、アーティストにどうなっていくのかについてだったり踏み込んだ話がきけて面白かったです。

9月7日(土) 多久編 / 20代・学生



場所と日時の選択がよかったと思います。自然の中で時々た立ちの音を聞きながらまさに ART な時間を過ごしました。

9月7日(土) 多久編 / 60代・県職員

現時点で、私自身がアートについてどのように考えているのか見えてきました。それぞれがもっと自分と向き合うべきと思いました。

10月19日(土) 鹿島編 / 50代・コピーライター



同じ発表者の作品も、3回それぞれアーティスト、キュレーター等によって違った視点で見るとはおもしろい

10月19日(土) 鹿島編 / 50代・自営業

講師のお二人は、アートの知識がなくてもイメージがわく丁寧な説明でした。学生さんたちのプレゼンは興味深かったです。

10月19日(土) 鹿島編 / 30代・ライター



# potari

アート情報サイト  
potariの運営



## 演習 ポータルサイトの運営 / 編集部ミーティング

2019.5.16 木

時間 19:00 ~ 21:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部 1号館  
アクティブラーニング室  
講師 杉本達彦  
(potari 世話人  
佐賀大学 地域デザイン学部 准教授)  
出席者数 22 名



### 関連記事

2019 年度スタート  
「ぼたり編集部だより」5月号！  
西ノ首有里子  
<https://potari.jp/2019/05/1693/>

来年度からはどうする？  
2019 年 8 月  
ぼたり編集部ミーティング  
大場美央  
<https://potari.jp/2019/08/2397/>

佐賀と周辺地域のアート情報を発信する Web サイト「potari」(ぼたり)は、2018 年 12 月にプレオープンした。2019 年度は編集部員とサポーターを再募集し、前年度からの継続メンバーを含む新規メンバー 25 名による新たな顔ぶれで始動した。編集部ミーティングとサイト運営スキルを向上するためのスキルアップ演習からなる年間計画が組まれていて、毎月顔を合わせることになる。

5月にメンバーがはじめて顔をあわせ自己紹介した。potari 世話人の杉本が、これまでの経緯と翌年度からの自主運営を目指していることを伝えた。情報交換用のオンラインツールの使い方やサイトの運営方法についても説明。それぞれのメンバーがサイト運営に協力できる得意なことを発表しあい、熱気あふれる場になった。

なお 4 月以前も、昨年度編集部員によるミーティングを毎月開催していた。2019 年度も、演習がなくとも毎月編集部ミーティングを開催している。(杉本)

## 演習 夏を感じる広報紙の制作 / 編集部ミーティング

2019.6.6 木

時間 19:00 ~ 21:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部 1号館  
A101 講義室  
講師 江副哲哉  
(あおいろデザインアートディレクター  
グラフィックデザイナー)  
出席者数 20 名



### 関連記事

初夏がやってきました  
「ぼたり編集部だより」  
前田彩花  
<https://potari.jp/2019/06/1800/>

君はだれ？  
「ぼたりニュース」に登場するかっぱくん  
前田彩花  
<https://potari.jp/2019/10/2498/>

potari の広報紙「ぼたりニュース」第 2 号編集に向けて、グラフィックデザイナーの江副哲哉さんによるワークショップを行った。江副さんは、昨年度から potari のフライヤーや広報紙を担当している。

自分の気に入った編集物を持ち寄って、江副さんのお話や、既存の広報紙やチラシを参考にしながら、第 2 号の配色やデザインのアイデアをふくらませた。グループ発表では奇抜なアイデアも登場。

その後、江副さんと担当編集スタッフによって、「ぼたりニュース」第 2 号が完成した。特集は、佐賀のアートスポットを紹介するアートマップ。紙面には、このときアイデアとして出た「かっぱのキャラクター」が登場している。(杉本)

## 演習 ローカルメディアを解体する

2019.6.21 金

時間 19:00 ~ 21:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部 1号館  
A101 講義室  
講師 阿部純  
(福山大学 人間文化学部メディア・  
映像学科准教授)  
出席者数 14 名



### 関連記事

ローカルメディアの解体！？  
まちの魅力を伝える地域文化誌  
岩下志実  
<https://potari.jp/2019/07/1954/>

阿部純さんとローカルメディアについて話しあう演習を開催した。ローカルメディアとは地域の情報を発信する小冊子や Web サイトのことで、2010 年代以降つぎつぎに登場している。阿部さんが持参した数多くの地域文化誌の実物を見ながら、それらが共通して取りあげがちなトピックやビジュアルがあることを学んだ。

阿部さんはローカルメディアの分析をしながら、自身も小冊子の編集に携わっている。広島県尾道市の仲間と発行している『AIR Zine』は、毎号サイズや形が変化するユニークなローカルメディアだ。

potari の広報紙のデザインや Web サイトのレポート執筆に取り組む編集部員にとって、この演習は各地の事例を知るよい機会となった。(杉本)

## 演習 記事執筆実践トレーニング①②

2019.7.11 木 . 25 木

時間 19:00 ~ 21:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部 1号館  
A101 講義室  
講師 忠聡太  
(福岡女学院大学 人文学部  
メディア・コミュニケーション学科講師)  
出席者数 ① 18 名 ② 13 名



### 関連記事

レポート記事執筆に挑戦！  
potari にとって良い記事とはなにか  
井上麻衣子  
<https://potari.jp/2019/07/2032/>

2 回にわたって実施した記事執筆実践トレーニングでは、昨年度に引き続き、忠聡太(旧姓:高橋)さんに添削指導をいただいた。演習では、編集部員が各自執筆したレポート記事の読みどころを発表し、読んだ感想を共有し、記事のポイントを意識しながらブラッシュアップした。

potari のような情報サイトの記事では、読んでくれた人を実際に動かすことが重要。そのためは、書き手の思考を、主観的な主張や五感に訴える表現を盛り込むことが効果的だ。そのほか、導入・本論・まとめと構造化した文章を意識すること、文章を読みやすくするための具体的な表現のテクニックを学んだ。

この演習で執筆し編集を重ねた記事は、potari に掲載されている。(杉本)



## 演習 写真をとる

2019.9.28±

時間 10:00～16:00  
会場 旧古賀家 / 佐賀市柳町周辺  
講師 関めぐみ (写真家)  
出席者数 10名

### 関連記事

取材しながらスマホで  
素敵な写真を撮ろう！  
実践型写真撮影演習  
穴井利奈  
<https://potari.jp/2019/10/2554/>



potari のレポート記事には、かならず写真を掲載している。写真の撮影になやむ編集部員が多いことから、はじめて写真をテーマにした演習を実施した。講師は、雑誌や広告写真で活動されている関めぐみさん。

撮影に使うカメラは、手持ちのスマートフォンのみ。編集部員は、事前に選んだ佐賀市柳町周辺の取材先をめぐる写真を撮影した。撮影後に再集合し、関さんから一人ひとりの写真にコメントをいただいた。関さんが伝えたのは、細かい撮影技術よりも、取材時の臨機応変な対応や撮影対象の取捨選択など。今後の撮影に活かせる実践的な技術だった。

この日の取材の成果は、写真を中心とした記事として potari に投稿されている。(杉本)

## 演習 有田町集中取材 / 現地取材記事編集

2019.10.26±

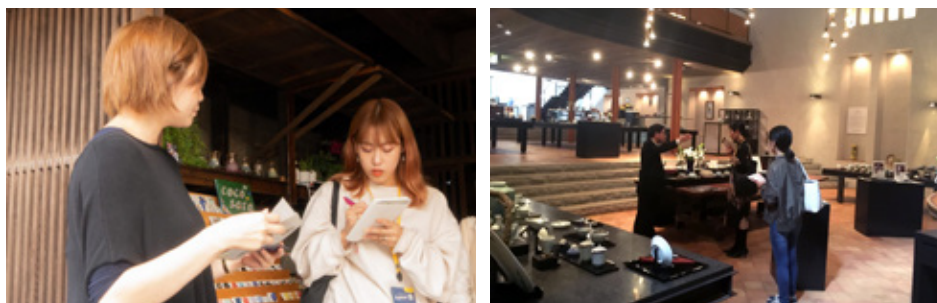
時間 10:00～16:00  
会場 佐賀県有田町  
出席者数 12名

2019.10.27日

時間 10:00～15:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部1号館  
アクティブラーニング室  
出席者数 6名

### 関連記事

有田町集中取材に向けて！  
取材先を決めるミーティング  
福本彩  
<https://potari.jp/2019/10/2908/>



気候も良くなってきた10月半ば。これまでの「記事執筆実践トレーニング」や「写真をとる」演習での学びをアプトプットすべく取材に訪れたのは日本を代表する焼き物の町、佐賀県有田町。予めグループごとに取材先、取材テーマを決め、取材交渉から行程作りまで数週間かけて準備を行った。歴史ある陶磁器会社一カ所に集中して取材を行ったグループ、若者向けの新しい有田を回ったグループ、数カ所の窯を訪れ作品作りの現場を取材したグループ。それぞれに収穫があったようだが、同じグループ内でも取材レポートの仕上がりは様々で、編集部員の個性も表れる取材活動となった。また、翌日は取材レポートを作成する時間に充て、サイトを訪れた読者に「有田へ足を運んでみよう」と思わせるようなレポート記事の執筆に努めた。(緒方)

## 演習 冬を感じる広報紙の制作 / 編集部ミーティング

2019.11.7木

時間 19:00～21:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部1号館  
A101 講義室  
講師 江副哲哉  
(あいろんデザインアートディレクター  
グラフィックデザイナー)  
出席者数 14名

### 関連記事

有田町集中取材を中心に、ぼたり  
ニュース冬号の編集会議をしました  
中田さとみ  
<https://potari.jp/2020/01/4004/>



11月7日、「冬を感じる広報紙の制作」が行われた。デザイナーの江副哲哉さんを講師に招き、第3号となる広報紙「ぼたりニュース」の制作のため事前に行った有田町の取材について情報共有と編集作業を行なった。まず取材時の各グループの代表者が、写真を見せながら取材内容を全体に発表し、その後、グループごとに取材に参加できなかった人も含めてより詳細な情報を共有した。

この情報をもとに KJ 法(※)を用いて「広報紙全体のキャッチコピー」、「各グループが伝えるコンテンツやテーマ」、「そのテーマが伝わるキャッチコピー」を付箋に書き出し、読者に伝えたいことをまとめた。

また、「冬」や「有田」といったテーマ・季節感が伝わりやすい色合いは何かについても話し合いをおこなった。演習後、編集作業を引き続き行い、1月に無事広報紙の発行に至った。(緒方・編集部員 赤土)

※ KJ 法：情報をカードに記述し、そのカードをグルーピングすることで図解、まとめていく手法

## 演習 「稼ぐ!」Webライターになるには / 「いいね!」の作り方 / 編集部ミーティング

2019.12.5木

時間 19:00～21:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部1号館  
A101 講義室  
講師 いわたてただすけ  
(株式会社 nico 代表 / ライター)  
出席者数 11名

2020.1.9木

時間 19:00～21:00  
会場 佐賀大学本庄キャンパス  
芸術地域デザイン学部1号館  
A102 講義室  
講師 いわたてただすけ  
(株式会社 nico 代表 / ライター)  
出席者数 7名

### 関連記事

自分の個性とは？  
佐賀ライターに教わる文章の書き方  
森彩美  
<https://potari.jp/2019/12/3731/>

目指すは「行動する」記事。  
「1000いいね!」を取れる potari 企画」  
を練り上げる  
伊藤恵子  
<https://potari.jp/2020/01/3949/>



年末年始にかけ佐賀県伊万里市でライターとして活躍されるいわたてただすけさんを講師に招き、「potari にふさわしい」レポート企画の立て方を学んだ。今回の演習の軸となったものは「個性」。初回は、個人の経験を組み合わせ世界に一つしかない自身のタイトル(肩書)を考えた。「出来ること」、「得意なこと」を考えると自信が付き、「私にはこんな強みがあるんだ」とうれしい気付きのある演習となった。

続いての演習では、このタイトルを利用した企画案を3つ考え、講師の意見も交えながらもう一工夫し読者に「読んだ。良かった」ではなく「読んだ。良かった。行ってみよう! (やってみよう!)」と思わせるような企画に絞り込んだ。「企画実現には相当な準備が必要」という講師の指摘どおり、受講生が納得のいく形で実践できるまでには時間を必要としそうだが、意欲は十二分に伝わってくる演習となった。(緒方)



## 編集部員が SMAART 主催のイベント取材しました！

### モバイル・アートクリニック 取材後記 (担当:伊藤恵子)

モバイル・アートクリニックは「自分の作品になぜ?を突き付ける」など講師の鋭い指摘や学生たちの真剣な姿に刺激を受けました。レポート作成にあたって、「記事執筆実践トレーニング」の「そこに行ったらきっかけを説明する」の助言を活かし、聴講者としてどんな思いがあったか盛り込みました。一方、講評で数多く提示された先行作品やアーティスト名をレポートで省略してしまったことが悔やまれます。良い写真は撮れませんでした。が「写真をとる」で「情報写真とイメージ写真の違い」を教わっていたため、情報写真として HAMASHUKU KURABITO の外観を撮った点は良かったです。取材をとおして現代アートの見方を学べたことが大きな収穫でした。

関連記事

若手アーティストのための相談所モバイル・アートクリニック  
10/19HAMASHUKU KURABITO 聴講してきた!  
伊藤恵子 <https://potari.jp/2019/12/3360/>



編集部員が撮影した取材写真

### オレクトロニカアートセンター 取材後記 (担当:大元茜、大場美央、副島大輔)



編集部員が撮影した取材写真

有田町はやきものの町で、絵を描くことや物を作ることが日常にある。特に、会場のある内山地区は窯元や商社が集まり、本当にこの町には“作ること”がいつも当たり前にあるのだ。

そこで、現代美術を見て体験し、考えるという事は、とても貴重なもののように思えた。「今、ここにしかない特別な空間」と作品の融合、作家とのふれあい。アートや制作は、とても身近なものであると実感させられた。学校に通うように、発見があるのが良かった。(大場美央)

関連記事

木彫アートを自分の手でつくる  
「オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室」  
大場美央 <https://potari.jp/2019/11/3468/>

取材に際しての心掛けは、プロジェクトに関わる人々の活動に対する思いや、活動を通して伝えたいこと・実現したいことを汲み、プロジェクトに関わっていない人や会場に来ていない人にも想像できるよう伝えることでした。「写真をとる」演習の取材で、人はそれぞれ熱い思いを持って活動していることを実感したからです。さらに、「記事執筆実践トレーニング」で印象に残った「読んでくれた人を動かす」より、読者が実際に来場して体験し、あるいは思考を深められるよう、余白や余韻を持たせることも意識しました。

potariの演習や、アートマネジメントの一連の活動の取材は、今後に活かしたい貴重な経験だったと感じています。(大元茜)

関連記事

オレクトロニカと有田で学ぶ  
「オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室」準備編  
大元茜 <https://potari.jp/2019/11/3365/>

### SMAART 大発表会 (担当:伊藤恵子)

SMAART 3年間の歩みを振り返る映像は、potariのみ関わっている、しかも今年度から参加した私にとっては非常に新鮮で、プロジェクトの大きさを実感させられました。自分の行ったグループ発表を含め、発表者に向けられた講評は、「何のために」「誰に向けて」「どこに向かって」活動するのが明確になっているのか否か、個人としての視点と同時に組織を俯瞰する視点があるのか否かを突くものでした。1年間、「何のために」というより「何となく」活動してきた姿勢を反省させられました。一方で、ぶれない自分スタイルを貫いた発表もあり、こういう自由さを内包する SMAART であり続けてほしいと強く感じました。

関連記事

アートとどう関わり、何を学んだか?これからどうするか?  
3年間を総括する! SMAART 大発表会  
伊藤恵子 <https://potari.jp/2020/02/4253/>



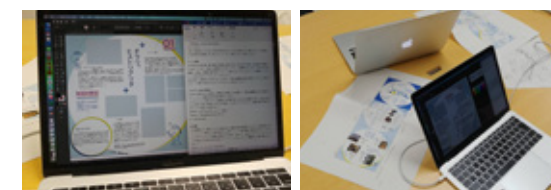
編集部員が撮影した取材写真

## 「ぼたりニュース」編集を終えて (担当:赤土リサ、前田彩花)



編集部員になって「自分で動く」ことの大切さを学びました。“編集”という言葉に憧れがあったこと、今まで何もせずフラフラしていたことへの危機感から編集部員になりました。徹底した受け身人間の私ですが、誰も指示をしてくれないので、完成のために「何か進めなきゃ!」と、とにかく「自分で動く」ことを心がけました。おかげで、完成した時の達成感をより強く感じることができました。また、デザイナーさんや、同じ編集部員のひとと助け合い相談しながらひとつのものを作り上げるのはとても楽しかったです。やってよかったです。(前田彩花)

編集部員として関わることで、potari ワークショップの中で話しながら作ったマップやレポートが、実際に広報紙となっていく過程を知ることができました。情報を伝える文章として執筆や構成をしていると、普段レポートや感想文を書いている時よりもずっと言葉選びに苦労しました。また広報紙をデザインする上では読みやすさや誤解を与えないことが大事だということも学びました。デザイナーさんとお話することもできて、今後社会人として仕事をする前に体験できてよかったなと感じました。(赤土リサ)





「写真をとる」演習

「写真をとる」演習でのグループごとの動きをまとめました。レポートをサイト内 (<https://potari.jp/>) に掲載しています。ぜひお気に入りのレポートを探してみてください。

a  
グループ



- メンバー：岩下志実 / 古賀隆正 / 福本彩
- 取材先：中央マーケット / わいわいコンテナ 江頭玩具店

関連記事

「レトロ」をさがす町歩き 佐賀市呉服元町・柳町 福本彩 <https://potari.jp/2019/10/2812/>

佐賀市柳町・呉服元町のカメラ越しの世界 岩下志実 <https://potari.jp/2019/10/2559/>

b  
グループ



- メンバー：伊藤恵子 / 大淵響子 / 副島大輔
- 取材先：リフトコーヒー / 紅茶専門店 紅葉 / トネリコ

関連記事

喫茶店のランチと専門店の紅茶 佐賀の街で出会ったお店 大淵響子 <https://potari.jp/2019/11/3228/>

トネリコカフェでランチ、紅葉で和紅茶の飲み比べ 副島大輔 <https://potari.jp/2019/10/2738/>

カメラをとおして出会う珈琲、紅茶、アート、それからアートでないいろんなもの 佐賀市柳町と白山商店街 伊藤恵子 <https://potari.jp/2019/10/2606/>

c  
グループ



- メンバー：坂本果奈 / 松澤恵美子 / 大元茜 / 前田彩花 / 古賀比露 (別日程で取材)
- 取材先：旧三省銀行 / 鍋島緞通、さがしもの・旧森家 / 南里邸 / 江頭玩具店 / 野中烏犀園 (古賀) / 池田醤油醸造店 (古賀)

関連記事

自分だけの発見！ 写真を通して見た佐賀の街 坂本果奈 <https://potari.jp/2019/11/3283/>

まるで絵画作品 旧森永家の鍋島緞通 佐賀市旧長崎街道沿い 松澤恵美子 <https://potari.jp/2019/10/2749/>

佐賀市柳町で、愛を語る 緞通、まち、郷土玩具 大元茜 <https://potari.jp/2019/11/2807/>

緞通、カレー、古民家、旧宅、歴史、おもちゃ…… 出会いがたくさん 佐賀市柳町 前田彩花 <https://potari.jp/2019/10/2689/>

有田町集中取材

有田町を取材したグループごとの活動をまとめました。

a  
グループ



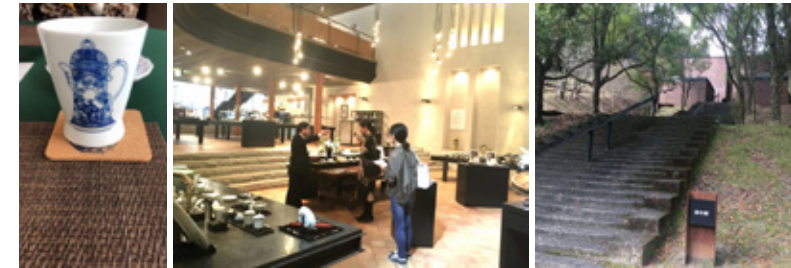
- メンバー：大元茜 / 小林愛恵 / 古賀隆正
- ルート：トンバイ堀 → 三空庵広場 → イタリアン BarDOMA → G工房 → 陶悦窯

関連記事

有田のまちと暮らしと窯元のつながり 小林愛恵 <https://potari.jp/2019/11/3579/>

有田のまちを築くもの 温故知新を体感する(前編) 大元茜 <https://potari.jp/2020/02/4195/>

b  
グループ



- メンバー：大場美央 / 中田さとみ / 前田彩花
- ルート：深川製磁(チャイナ・オン・ザ・パーク) → aritahuis → 棕露地 → 九州陶磁文化館

関連記事

超人が有田焼の魅力に触れた日 前田彩花 <https://potari.jp/2020/01/3074/>

有田明治時代 深川製磁の美意識の中へ 大場美央 <https://potari.jp/2020/01/3061/>

有田で憧れの深川製磁を訪ねる 中田さとみ <https://potari.jp/2020/01/3685/>

c  
グループ



- メンバー：大淵響子 / 副島大輔 / 福本彩 伊藤恵子 (グループミーティングのみ参加)
- ルート：アリタセラ → ギャラリー有田 → cocosara → 藍土

関連記事

生活用品からアクセサリーまで、身近に感じる有田焼 福本彩 <https://potari.jp/2019/12/3023/>

あなたはどこに行ってみる？ 現代の有田焼を知るためのお店 4選 副島大輔 <https://potari.jp/2019/11/3025/>

1日じゃ足りない！ 有田の魅力を知る 大淵響子 <https://potari.jp/2020/02/3122/>

d  
グループ



- メンバー：坂本果奈 / 西ノ首有里子 / 松澤恵美子
- ルート：有限会社 伝作窯 → 幸楽窯 徳永陶磁器(株)

関連記事

見て聞いて体験して感じる 有田焼 坂本果奈 <https://potari.jp/2019/11/3078/>

伝作窯と幸楽窯 佐賀県有田の個性的なふたつの窯元 松澤恵美子 <https://potari.jp/2019/11/3163/>



## 編集部員の声 アンケートより



他人がどんなデザインが好きか知ることその人柄まで何となくわかるのがおもしろいと思いました。

6月6日(木)夏を感じる広報紙の制作/10代・男性

zineを見るたびに持って帰っていました。「カッコイイ」には理由があるという言葉が印象的でした。理由を深く考えるようにします。あと、私もzineを作ってみます。

6月21日(金)ローカルメディアを解体する/30代・女性



多くの人にアートの楽しさを知ってもらえるような、アート好きな人にはより深めてもらえるような記事を書きたい。

7月11日(木)25日(木)記事執筆実践トレーニング①②

写真の撮り方だけでなく取材をする上で大切なことを学ぶことができた。

9月28日(土)写真をとる/20代・女性



基本的な写真の撮り方。少し工夫するだけでたくさんの見せ方ができると思わなかった。

9月28日(土)写真をとる/20代・女性

撮影はどう撮ったらよく見えるかなと考えながら撮りました。難しかったです。取材はもっと相手のお話を引き出せば…と思いました。

9月28日(土)写真をとる/20代・女性



取材の相手の話を聞き出せるようにもっとガツガツできるように頑張ります。

10月26日(土)有田町集中取材/20代・女性

ただ客としてお店に入るときは、お店の人と話をすることはないが、実はお店の人いろんな考えや思いを抱いてらっしゃるのだと改めて感じました。「取材」をどのようにしたらいいのかよくわかりませんが、これからもいろんな人の話を聞きたいと思います。

10月26日(土)有田町集中取材/30代・女性



柔軟な発想を出す場に最近あまり関わっておらず、なかなか案が出せなくて苦戦しました(泣)でも、編集の作業ってこんな風にやるんだと理解が深まったといえますか、常にレポートを書くネタ探しをしながらレポートのキャッチコピーを考えるのもいいなと思いました。

11月7日(木)冬を感じる広報紙の制作/20代・女性

自分のキャッチコピーを作るのが難しかったです。もう少し掘り下げて個性を追求していきたいです。とても興味深く面白かったです。まとめること、パツと話したり書いたりすることが苦手なので克服したいです。

12月5日(木)「稼ぐ!」Webライターになるには/30代・女性



自分や周囲の人の・個性の見つけ方/活かし方が腑に落ちました。得意なことだけやるという点に納得しました。

12月5日(木)「稼ぐ!」Webライターになるには/30代・女性

ちょっと聞いたところとつぎにくい内容をわかりやすく説明していただきました。「戦闘力×時間」が結果を出せるという話に勇気をもらいました。

1月9日(木)「いいね!」の作り方/30代・女性



「企画の三段階」の講義内容がなるほどと思うことばかりで勉強になりました。読者に行動してもらうためには手間がかかる。手間がかかるのを厭わないメディアが生き残る。記事を書く労力を惜しんではいけないと思いました。

1月9日(木)「いいね!」の作り方/60代・女性

## 編集部員の構成

- 年代 10代:1名/20代:11名/30代:5名/40代:3名/50代:2名/60代:2 計 24名
- 職業 公務員/主婦/福祉関係/フリーライター/有田焼職人/パート/農協職員/教員/会社員/大学生
- 地域 佐賀県:22名/福岡県:2名



SMART 大発表会



# SMAART 大発表会

2020.1.26日

時間 13:00 ~ 16:30  
 会場 佐賀大学本庄キャンパス  
 教養教育2号館 2110AL 室  
 講師 森司  
 (アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長)  
 若林朋子  
 (プロジェクト・コーディネーター / 立教大学大学院  
 21世紀社会デザイン研究科特任准教授)  
 倉成英俊  
 (株式会社電通電通 B チーム)  
 オレクトロニカ  
 加藤亮 + 児玉順平 (美術ユニット)

発表者 16名  
 聴講者 10名

SMAART2019年度の総まとめとして「大発表会」を開催。アートマネジメントセミナー受講生チーム、potari 編集部員チーム、それぞれ個人発表またはグループ発表にて2019年度の総括をしてもらう。発表の形態は特に指定せず各自のアイデアに委ねたところ、持ち時間10分の中で、スライドによるオーソドックスな発表あり、紙媒体の配布資料による発表あり、イメージ映像に即興演奏を付けての発表あり、一年間の記録写真をコラージュした壁紙での発表あり、学生も社会人も様々な工夫が凝らされた発表で受講生たちの熱量が伺えた。応じる講師陣のコメントにも熱が入り、総じてタイムテーブルは押し気味進行。夜の懇親会への参加率も高く、始終テンション高めで幕を閉じた。本年度最初の講座で森司氏が示された「楽日初日」との話をふまえ、SMAARTの楽日とともに受講生それぞれにSTAARTする今後の活動に期待したい。(花田)



講師：森司氏



講師：若林朋子氏



講師：倉成英俊氏



講師：オレクトロニカ 加藤亮氏



講師：オレクトロニカ 児玉順平氏

## potari

発表者：前田彩花 / 赤土リサ



**感想**

広報誌を作る上で何が大事か知ることができた。実際仕事をされている人と関わることができた。報道相と早めの行動の重要性を痛感した。

表紙は有田氏の様々っぽく線画イラストで。

## potari

発表者：伊藤恵子 / 大元茜 / 中田さとみ



**わたしたちのpotariまとめ**

potariによって動いたわたしたちの3つの

<ul style="list-style-type: none"> <li>視野が広がった</li> <li>新しい人との出会い</li> <li>自分自身の強みや得意分野</li> <li>自分自身の弱みや苦手分野</li> <li>自分自身の価値観</li> <li>自分自身の生き方</li> <li>自分自身の未来</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>視点が変わった</li> <li>新しい視点での見方</li> <li>新しい視点での考え方</li> <li>新しい視点での行動</li> <li>新しい視点での生き方</li> <li>新しい視点での未来</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>編集部員/サポーターでアイデアを積み重ねる</li> <li>編集部員/サポーターでアイデアを実践する</li> </ul>
---	--	---

・自ら動く  
 ・自ら提案する  
 ・自ら発信する

より良いpotariを目指していこう！

## potari / アートマネジメント

発表者：古賀隆正



それはいつも日常の中にある

## アートマネジメント

発表者：井上菜々子 / 安原彩絵 / 穴瀬聖 / 小野和美



**発生の場で学んだこと**

- ・アーティストに「妥協」はない
- ・展示会における鑑賞者の重要性



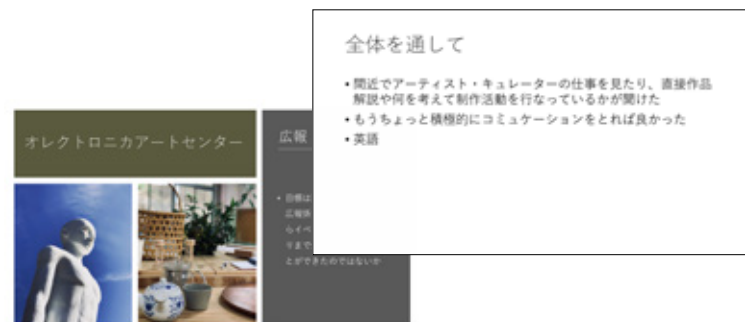
アートマネジメント

発表者：徳永幸治



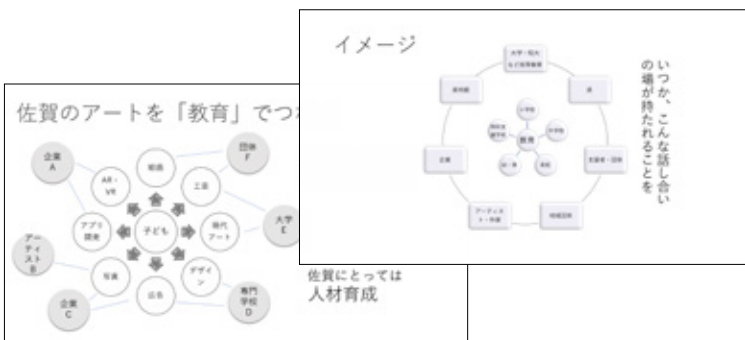
アートマネジメント

発表者：別府菜々子



アートマネジメント

発表者：末次広幸



アートマネジメント

発表者：江口博子 / 森恵 / 中田さとみ / 井手香織



エッセイ



## SMAARTの3年間

小坂 智子

2016年にスタートしたSMAARTは、2020年の春に、当初計画である3年の区切りを迎える。地域において芸術・文化に携わり、地域の文化振興を担うことのできる人材を養成することは、当初から掲げてきた目標であるが、3年間にわたるSMAARTの活動は、人材養成をベースにアートに関わる「ひと」や「こと」の広がりを生み出してきた。

芸術の力を社会において生かしていくためには、創造する人だけでなく、支える人やその価値を認め、発信することのできる人の存在も不可欠であるという観点から、3年間にわたりアートマネジメント人材の育成に取り組んだ。本年度は、原点にたちかえり、創造する行為そのものを考えること、そして新たに創造する人を育む取り組みが行われた。芸術を創造することと社会への発信というふたつの軸をより合わせていくこともいえる。アートマネジメントセミナーを通して実現した芸術の磁場は、ひとを結び新たな「こと」の発信とつながっていく。

potariを通して実現した「ひと」と「こと」のネットワークは、今後さらに充実していくことが、期待されている。参加者にとっては、情報の発信者となることの面白さが体験できたように見えるが、一方で、発信する責任もまた、実感されたのではないか。

佐賀大学は、地域の要請に応え、地域と共に発展し続ける大学を目指している。佐賀という地域とともに大学は何をすることが出来るのか、という問いは、それぞれ学部や部局の専門性の中で問われ続けている。芸術に関わる事象とひとをつなげていくSMAARTの活動は、その一つの答えでもある。

地域の文化資源の発掘からはじまったSMAARTの試みは、地域の特性に立脚しつつも、芸術の創造と社会への広がり配慮しつつ、区切りを迎えた。もちろん、それが終点ではないことは言うまでもない。地域に種をまく、この試みが継続され、さらに広がっていくことを期待している。

## 尾道市、雑感

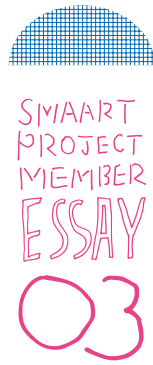
西島 博樹

2019年度SMAARTアートマネジメントセミナーで広島県尾道市を訪れた。言わずと知れた坂の街である。訪問2日目に地元ガイドさんの案内のもと尾道市内をまち歩きしたが、想定どおりかなり傾斜のきつい坂道の連続であった。道幅は一人の人間がやっと歩けるほどの狭さである。しかも、当日は雨が降っていて、傘が前方の視界を遮り、濡れたコンクリートは滑りやすかった。一般的には快適なまち歩きといえない状況である。しかしながら、個人的な感想を言えば、尾道での坂道との格闘は、けっして嫌でなく、ましてや苦ではなかった。むしろ懐かしくもあり、心弾ませる時間であったといつてよい。というのも、私は、坂の街の代表格と言える長崎市と佐世保市に合算して約30年間住んでいたからである。坂の街の大きな魅力は、坂道の真下(手が届きそうな距離)に海が広がっていることである。この風景が人々を魅了する。坂本竜馬が亀山社中を長崎の高台に設けたのも頷ける話で、いまでもその建物とそこから見える景色が多くの人々を惹きつけている。尾道の高台から見下ろした瀬戸内海もまた絶景であった。

坂の街は学術的に斜面市街地(または斜面都市)と呼ぶらしい。斜面都市は、効率性を重視する現代社会の価値観からみれば、周回遅れの都市の部類に属するだろう。私がかつて暮らしていた長崎市もそうであるが、尾道市の斜面に建つ住宅は、自動車はおろか、二輪車や自転車さえも寄せ付けない。市街地で買い物をした住民が帰宅するためには、傾斜のきつい坂道を重い荷物を持って自力で歩かなければならない。高齢者には過酷な現実である。必然的に、空き家や人口流出が大きな社会問題となる。

2007年に活動を開始した尾道空き家再生プロジェクトは、空き家×建築、空き家×環境、空き家×コミュニティ、空き家×観光、空き家×アート、を柱に様々な活動を行っている。空き家問題は、短期間で解決できるものではなく、長い年月をかけて辛抱強く取り組む必要がある。今回の視察では、再生された空き家(カフェ、ホテル)で大勢の観光客と出会うことができた。都会の効率性に疲れた人々が、あえて非効率性を求めてやってくるのである。斜面都市は意外と大きな可能性を秘めているのではないか、絶景の坂道を歩いていて、ふとそう感じた。周回遅れのランナーは、そのままマイペースで走り続けることである。気が付けば先頭を走っているかもしれない。





## SMAARTの3年間に寄せて

花田 伸一

佐賀大学芸術地域デザイン学部にて2017年度より開始した3年間のアートマネジメント講座「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート」(SMAART)、その集大成の一つとして2019年11月に佐賀県有田町の旧しらかわ保育園にて「路上活動実験室」をテーマとしてオレクトロニカ(美術ユニット/大分)による美術展『オレクトロニカアートセンター』(OAC)を開催し、受講生とともにその舞台裏のアートマネジメント実践に取り組んだ。SMAARTでは江戸期に京都・鴨川のほとりで道行く人に煎茶を振舞いながら禅の教えを説いた佐賀ゆかりの禅僧である売茶翁を一つの思想的な拠り所として掲げ、「飲食」、「移動」、「路上」などの要素に主眼を置きながら取り組んできたが、OACではそのいずれの要素も包含した複合的なアート・プロジェクトを展開できたように思う。

2017年度 SMAART 記録集にも記したが、私の関心は美術館や大学がいかに「ライブ」たりえるかにある。美術館も大学も西欧にて誕生し、特に近代以降に確立されてきた「知」の制度であるが、私は日本の美術館や大学に職を得ながらも常に違和感を拭いきれないでいる。この違和感こそが私が飽きもせずキュレーションに携わる活力源ではあるのだが、その一方で、それでは美術館や大学をどのように更新できるのか、どのような仕組みや制度がより望ましいのかについては、なかなかビジョンを掴めずにいる。

現代アートの文脈では1990年代以降に急速に興隆したオルタナティブ・スペースが一つの回答を示している。では大学のオルタナティブはどのように可能か。私はSMAARTを通じて売茶翁の思想や活動から美術館や大学のもう一つの在り方のヒントを探りたかった。近世以前の日本の寺社仏閣には美術館や大学が担っている機能の原型を見ることができからだ。

売茶翁は長らく身を置いていた禅寺を50歳過ぎで離れ、河川敷で茶売りとなった。私も一度は美術館から出てみたものの、10年足らずで今度は大学に身を寄せることになった。次また大学を出てゴザ一枚で路上に出るにはまだ覚悟が決まらない。

しかし昨今の社会情勢を鑑みるにつけ、近い将来誰もが売茶翁のようにストリート精神をもってインディペンデントにセルフマネジメントをしながら「ライブ」なモバイル人生を送ることになる日が意外と早く訪れるようにも思う。であるならば、つまるところSMAARTの3年間はそのための準備体操の場であったといえるだろう。



## 路地裏の potari に花は咲くか

杉本 達應

3年間にわたるSMAARTの活動が終わった。いまだから白状しておこう。はじめる前からやりきれるか不安だった。なぜなら開設したばかりのわたしたちの小さな学部にとって、この事業はあまりにも規模が大きすぎるからだ。すくなくともわたしにとっては、日々の教育研究や組織運営に加え、SMAARTを並行して進めることは苦勞の連続だった。それでも多くの方々の協力をいただいて、無事終わることができたことに感謝しかない。

SMAARTは地域に根ざしたプロジェクトだが、運営メンバーの教員・スタッフには佐賀出身者が一人もいなかったことは記録しておきたい。よそ者ばかりのチームが佐賀のアートを考え、内外の人びとのネットワークをつくりあげた点では、希有な活動だった。SMAARTが終了してもその余波はのこり、さまざまな活動が出現するのではないだろうか。そんな息の長い効果があらわれることを期待している。

わたしが担当したポータルサイト potari (ぼたり) は、地域の文化芸術情報の流通をスムーズにするための実践的プロジェクトだ。大きな講座やイベントが立ち並ぶ「SMAART 大通り」ではなく、その路地裏で進めてきたような活動だ。小さな土地をこつこつと開墾した結果、表通りのイベントが終わってもこのサイトだけは残りつづけることになる。

最終年度あらたな顔ぶれで再スタートしたぼたり編集部では、よい変化がいくつも生まれた。美術館やギャラリーから開催情報をいただくようになった。広報紙「ぼたりニュース」の制作に編集部員がより深くかわるようになった。佐賀県立美術館の学芸員が毎月寄稿してくれるようになった。サイトデザインがリニューアルし見やすくなった。編集部員が取材した成果は、この記録集にも載っている。

記事数とアクセス数を増やし、徐々に知名度を獲得してきた potari は、地域の文化芸術情報の発信とアーカイブに貢献している。potari は、この分野の情報収集になくはならない存在として、既存のマスメディアと肩を並べるサイトになりうるポテンシャルをもっている。

今後の課題は大きい。potari の種まきはできたものの、うまく芽がでて花が咲くかは未知数だ。事業化できる規模のサイトではないため、自主運営のかたちを考えなければいけない。コミュニティを保ちつづけることは必須だが、その存続だけが目的の活動にすりかわるのは危険だ。potari が続くかどうかは、なにより本気でサイトを育てたい人の存在にかかっている。この原稿を書いている時点では、まったく楽観できる状態ではないが、これからも成長することを祈るように見守っている。





資料



## 広報資料

SMAART 全体 / アートマネジメントセミナー



モバイル・アート  
クリニック チラシ

A4 サイズ / 両面カラー

デザイン  
森 恵美 (CW-BAKU inc)



オレクトロニカ  
アートセンター  
チラシ

A4 サイズ / 両面カラー

デザイン  
森 恵美 (CW-BAKU inc)



発生の場 チラシ

A4 サイズ  
表面カラー裏面モノクロ

デザイン  
森 恵美 (CW-BAKU inc)



文化庁で開催された  
事業報告会  
ポスター

A1 サイズ / 片面カラー

デザイン  
森 恵美 (CW-BAKU inc)

SMAART  
Web サイト

サイト構築  
株式会社ローカルメディアラボ

<https://sma.art.saga-u.ac.jp/>



● Facebook : @SMAART.sagau ● Twitter : @smaat\_sagau ● Instagram : @smaat\_sagau

potari



広報紙 ぼたりニュース第 2 号  
(2019 年 9 月発行)

タブロイド判 4P / 両面カラー

デザイン 江副哲哉 (あおいろデザイン)  
編集 前田 / 赤土 / 中田 / 井上 (編集部員)



広報紙 ぼたりニュース第 3 号 (2020 年 1 月発行)

210mm × 630mm / 巻三つ折 6P / 両面カラー

デザイン 江副哲哉 (あおいろデザイン) 編集 前田 / 赤土 (編集部員)



Web サイト

デザイン監修 江副哲哉 (あおいろデザイン)  
サイト構築 株式会社ローカルメディアラボ

<https://potari.jp>

## メディア掲載一覧

- 新聞
  - 2019 年 4 月 19 日 (金) 佐賀新聞 「情報サイト「potari」立ち上げ 佐賀のアート情報まとめて 来月 6 日まで編集部員募集」 (花木美実)
  - 2019 年 6 月 25 日 (火) 佐賀新聞 「トップ芸術家が個別指導 県内 3 カ所「アートクリニック」」 (花木美実)
  - 2019 年 10 月 29 日 (火) 佐賀新聞 告知記事「大分の美術ユニット「オレクトロニカ」 有田に「路上活動実験室」 11 月、保育園跡で展示と体験」 (花木美実)
  - 2019 年 11 月 7 日 (木) 佐賀新聞 「路上活動テーマ 作品展示や体験 大分の美術ユニット」 (古賀真理子)
  - 2019 年 11 月 8 日 (金) 西日本新聞 「磁器の町にアート空間登場 有田町 大分の 2 人組 トークショーも」 (古賀英毅)
  - 2020 年 1 月 10 日 (金) 佐賀新聞 「アートの見方に新たな視点 佐賀大で展覧会「発生の場」」 (花木美実)
  - 2020 年 2 月 2 日 (日) 長崎新聞 芸術ウェブ「行動の意味問いかける 企画展「発生の場」」 (親和アートギャラリー学芸員 藤松綾子)
- テレビ
  - 2019 年 11 月 4 日 (月) ~ 11 月 10 日 (日) 有田ケーブル・ネットワーク toco toco
- Web
  - 2019 年 6 月 25 日 (火) ARTNE (アルトネ) 「《募集》「モバイル・アートクリニック」の参加アーティスト【NEWS】」 (アルトネ編集部)  
▶ <https://artne.jp/news/733> (2019 年 11 月 26 日アクセス)
  - 2019 年 11 月 3 日 (日) ARTNE (アルトネ) 告知記事 「<アートプロジェクト> オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室」  
▶ <https://artne.jp/event/1272> (2020 年 1 月 23 日アクセス)
  - 2019 年 10 月 29 日 (火) 有田観光協会ありたさんぽ 告知記事 「オレクトロニカアートセンター 路上活動実験室」 2019 年 11 月 3 日、4 日、9 日、10 日開催!  
▶ <https://www.arita.jp/news/3666.html> (2019 年 11 月 26 日アクセス)
  - 2019 年 10 月 29 日 (火) 佐賀新聞 LIVE 告知記事 「大分の美術ユニット「オレクトロニカ」 有田に「路上活動実験室」 11 月、保育園跡で展示と体験」  
▶ <https://www.saga-s.co.jp/articles/-/447265> (2019 年 11 月 26 日アクセス)
  - 2019 年 11 月 7 日 (木) 佐賀新聞 LIVE 「路上活動テーマ 作品展示や体験 大分の美術ユニット」  
▶ <https://www.saga-s.co.jp/articles/-/450768> (2019 年 11 月 26 日アクセス)
  - 2020 年 1 月 8 日 (水) ARTNE (アルトネ) 告知記事「発生の場 / Ignition Field」  
▶ <https://artne.jp/event/1330> (2020 年 1 月 8 日アクセス)
  - 2020 年 1 月 10 日 (金) 佐賀新聞 LIVE 「アートの見方に新たな視点 佐賀大で展覧会「発生の場」」  
▶ <https://www.saga-s.co.jp/articles/-/474766> (2020 年 1 月 14 日アクセス)
  - 2020 年 12 月 30 日 (水) 有田観光協会ありたさんぽ 告知記事 「「発生の場 / Ignition Field」 2020 年 1 月 8 日 (水) ~ 佐賀大学美術館 他に開催！」  
▶ <https://www.arita.jp/news/3775.html> (2020 年 1 月 30 日アクセス)



## 講師プロフィール



### 森司

アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長

1960年愛知県生。公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。「東京アートポイント計画」の立ち上げから関わり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業「Tokyo Art Research Lab」を手がける。「東京都による芸術文化を活用する被災地支援事業 (Art Support Tohoku-Tokyo)」や「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の主要なプログラムとなる「東京キャラバン」「TURN」のプロジェクトディレクターを兼務。女子美術大学特別招聘教授。

撮影：Kazue Kawase



### 若林朋子

プロジェクト・コーディネーター  
立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科特任准教授

1999～2013年(公社)企業メセナ協議会勤務。企業が行う文化活動の推進と芸術支援の環境整備に従事。在職中ネットTAMの企画・運営に携わる。現在フリーランスで、アート以外にも含む各種事業のコーディネート、編集・執筆、調査研究、コンサル、評価、NPO支援等に取り組む。

撮影：山本尚明



### 中ザワヒデキ

美術家

1963年新潟県生。千葉大学医学部卒。1990年「バカCG」、2000年「方法主義宣言」、2010年「新・方法主義宣言」、2016年「人工知能美学芸術宣言」。3Dプリンタ関連特許。著書『現代美術史日本篇』。元・文化庁メディア芸術祭審査委員。



### 辛美沙

MISA SHIN GALLERY 代表

東京芸術大学非常勤、森美術館、アートフェア東京等を経て、2010年、東京にギャラリーをオープン。世代やジャンルを超えた国内外のアーティストを紹介し、アートが持つ可能性を提示。著書に『アート・インダストリー』(美学出版、2008年)。



### 椿昇

美術家 / 京都造形芸術大学美術工芸学科学科教授

日本を代表する現代アーティストの一人であると同時に、卓越した教育者でもある。アートの新しい可能性を探る実践も多く、妙心寺退蔵院の模絵プロジェクトやアーティストフェア KYOTO、青森トリエンナーレ 2018 のディレクターなど活動は多岐にわたる。



### 山下里加

アートジャーナリスト / 京都造形芸術大学アートプロデュース学科学科教授

関西を拠点にアートライターとして活動した後、大阪市立大学大学院創造都市研究科で学ぶ。現在は、「はじめての文化政策」や「文化事業の調査・評価」を教授しつつ、専門誌「地域創造」を中心に、全国の文化によるまちづくりを 100カ所以上取材・執筆している。



### 島袋道浩

美術家

1969年神戸市生。那覇市在住。1990年代初頭より国内外を旅し、そこに生きる人々の生活やコミュニケーションに関する作品を制作。パリのボンビドー・センター、ロンドンのヘイワード・ギャラリーなどでのグループ展やヴェニス・ビエンナーレ(2003、17年)、サンパウロ・ビエンナーレ(2006年)、リヨン・ビエンナーレ(2016年)などの国際展に多数参加。



### 鷺田めるろ

キュレーター

1973年京都市生、金沢市在住。あいちトリエンナーレ 2019 キュレーター。元金沢 21世紀美術館キュレーター(1999年～2018年)。第57回ヴェニス・ビエンナーレ国際美術展日本館キュレーター(2017年)。



### オレクトロニカ(加藤亮+児玉順平)

美術ユニット

加藤亮(1984年大分市出身、在住)と児玉順平(1984年熊本市出身、竹田市在住)による美術ユニット。2011年から「制作と生活」をテーマに大分県竹田市を拠点に活動を展開。作品制作のみならず、空間デザインや企画のプロデュースなど活動は多岐に渡る。多様多様に化する時代のすき間を埋める為、表現の手法にとらわれず模索を続けている。代表作は小さな木彫シリーズ「wood figure」、「風景への参道」等。2018年には佐賀でレジデンスプロジェクト「side by side」を展開。地域や路上といったより生活に近い場所での表現を行う。



### 福田篤夫

彫刻家

1958年北海道生まれ。彫刻家、ヨーロッパ諸国での個展多数。1982年より CONCEPT SPACE 主宰。2007年より Ais 主宰。「渋川現代彫刻トリエンナーレ」「企画の遊戯」「数寄者達—琳派以後の方法—」等を企画。リチャード・セラ、カール・アンドレ、イミクネーベル、ロジャー・アックリング、ゲルハルト・リヒター等、国内外の作家展を開催、2020年「企画 200 回記念展」。



### 上村卓大

彫刻家

1980年高知県生まれ。2008年武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程単位取得退学。近年の展覧会に、2009年「変成態—リアルな現代の物質性—vol.3「のようなもの」の生成 泉孝昭×上村卓大」(gallery α M、東京)、2014年「Under35/2014 上村卓大展」(Bank ART Studio NYK、横浜)、2018年「CHIKUGO ART POT 2018 スーパーローカルマーケット」(九州芸文館、福岡)など。



### 鈴木淳

美術家

1962年北九州市生まれ。1987年熊本大学理学部生物学科卒業。近年の展覧会に、2012年個展「なにもない、ということもない」(福岡市美術館、福岡)、2013年「福岡現代美術クロニクル 1970-2000」(福岡県立美術館、福岡市美術館、福岡)、2017年「誉のくまもと展」(熊本市現代美術館、熊本)、2018年「糸島芸農 2018」(第2レジデンスハウス・稲荷山、福岡)、「ちっこびより—筑後を楽しむ展覧会」(九州芸文館、福岡)など。



### チェ・ヨンファン CHOI Young-Hwan

美術家

1978年韓国・堤川市生まれ。ソウル国立大学大学院博士課程絵画専攻在籍中。近年の展覧会に、2010年 Letters from Griffintown (Auberge Alternative)'s arts centre、モントリオール)、2012年「Donestory.com」(Space O'NewWall、ソウル)、2018年「Where do you belong to?」(Boan ArtSpace、ソウル)など。



### セオ・ジュノ SEO Juno

キュレーター

1979年韓国・釜山生まれ。2009年韓国芸術総合学校美術理論科修了。2011年アートのスペース O'NewWall (ソウル) 設立。主な企画に、2011年「Peace Like River」(Space 99、ソウル)、2013年「Common sense of the East」(Gallery 175、ソウル)、2014年「釜山ビエンナーレ 2014 特別展アジアン・キュレトリアル」(キスワイヤ水工場、釜山)など。



### 江副哲哉

あおいるデザイン アートディレクター/グラフィックデザイナー

1982年生まれ。福岡県生まれ長崎県育ち。佐賀大学文化教育学部美術工芸課程を卒業。デザインを通して情報・空間・広告に至るコミュニケーションの伝達を目指し、暮らしの中から生まれてくるアイデアやヒラメキを探求しながら活動している。子どもの芸術的感性について研究中。potari のフライヤーや「potari news」、「SAGA 食べる通信」、「さがごもの居場所のほん」(佐賀県)、「please」(JR九州)等を制作。



### 阿部純

福山大学人間文化学部メディア・映像学科学科准教授

1982年生まれ。東京都出身、広島県尾道市在住。東京大学大学院情報学府博士課程単位取得退学。専門はメディア文化史。研究対象は、藝に始まり、各地の zine の表象分析・ライフスタイル。共著に『文化人とは何か?』(東京書籍)、『建築の際』(平凡社)、『現代メディア・イベント論:パブリック・ビューイングからゲーム実況まで』(勁草書房)など。現在は尾道を拠点に、尾道在住のアーティストや学芸員、空き家再生家、研究者たちと AIRzine 編集室を立ち上げ、「AIRzine」という zine を発行し、「住まいマガジンびお」にでているいな暮らしに関するエッセイを連載中。



### 忠聡太

福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科学科講師

ポピュラー音楽を中心に 20 世紀の環太平洋圏の文化史を研究する。学部生時代より音楽サイトやテレビ誌にて執筆と編集を担当。最近の寄稿媒体に『ユリイカ』、『カルチャープレス』など。2016年より現職。



### 関めぐみ

写真家

ワシントン D.C. 生まれ。広告や雑誌、web や書籍、カタログの撮影など。ムービーの撮影も時々。2010年8月の1ヶ月間、菓山の一角海岸にて来訪した客を4×5大判カメラで撮影するイベント「8月の写真館」を開催。約150組を撮影。書籍に同名作品集、インドの北西の街を撮影したビジュアルブック「JAIPUR」。



### いわたただすけ

株式会社 nico 代表 / ライター

佐賀でもっとも「いいね」数を稼ぐライター。フリーランス歴 15 年。政治家、起業家などのゴースト著書多数。10 校の学校案内パンフレット、20 社の企業案内パンフレット、30 社のウェブサイト、100 社の求人情報制作。2017年3月、東京都から佐賀県に移住。



### 倉成英俊

株式会社電通 電通日チーム

1975年佐賀県生。小学校の時の将来の夢は「発明家」。自称 21 世紀のプラプラ社員。電通クリエイティブ局に入社以降、数々の広告を作った後、広告のスキルを拡大応用し、気の合う人々と新しい何かを生むことをミッションに、公/私/大/小/官/民間関係なく活動中。電通総研フェロー。



### 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局 企画運営スタッフ

- 小坂 智子 (芸術地域デザイン学部 教授)
- 花田 伸一 (芸術地域デザイン学部 准教授)
- 西島 博樹 (芸術地域デザイン学部 教授)
- 杉本 達應 (芸術地域デザイン学部 准教授 / (2019年10月～) 首都大学東京 准教授)
- 緒方 和子 (企画運営スタッフ)
- 吉村 美歩 (企画運営スタッフ)

3年間、ありがとうございました。  
SMAART での活動が受講生の皆さんにとって今後を彩る一つの色に加えていただくと幸いです。

事務局一同





## 売茶翁とは

佐賀ゆかりの江戸期の禅僧、売茶翁 (1675-1763) は肥前蓮池 (佐賀市) に生まれ、57歳まで黄檗宗・龍津寺の禅僧として仕えました。61歳のとき京都鴨川のほとりに簡素な路上喫茶「通仙亭」を開き、身分の貴賤に関わらず人々に煎茶を通して禅の教えを説きました。その姿に伊藤若冲、池大雅、与謝蕪村ら当時の文人たちも敬意を寄せています。

### 2019年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業 「芸術を通じた地域創生人材の育成～佐賀の地域資源をめぐるアートカフェとネットワークづくり」 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート (SMART)

主催：佐賀大学芸術地域デザイン学部

協力：佐賀県 / 公益財団法人 佐賀市文化振興財団 / 文化経済学会〈日本〉九州部会

後援：佐賀新聞社 / 西日本新聞社

#### 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局 2019年度企画運営スタッフ

小坂 智子 (芸術地域デザイン学部 教授)

花田 伸一 (芸術地域デザイン学部 准教授)

西島 博樹 (芸術地域デザイン学部 教授)

杉本 達應 (芸術地域デザイン学部 准教授 / (2019年10月～) 首都大学東京 准教授)

緒方 和子 (企画運営スタッフ)

吉村 美歩 (企画運営スタッフ)

芸術地域デザイン学部総務

#### 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート記録集 2019

発行日 2020年3月5日

編集 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局

写真 長野聡史 (長野聡史写真事務所) (★マーク および p27～31、p36～39、p52～p54)

デザイン 森恵美 (CW-BAKU inc.)

発行 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局

佐賀大学 芸術地域デザイン学部 〒840-8502 佐賀市本庄町1番地

TEL : 0952-28-8309

URL <https://sma.art.saga-u.ac.jp/>